

令和7年度

年報

2025

横浜国立大学
地域連携推進機構
成長戦略教育研究センター

年報

令和7年度

2025

CONTENTS

目次

I.	センター概要	3
II.	教育・人材育成事業	4
	1. 学部生へのキャリア教育	4
	(1) アントレプレナー入門 (担当：教授 為近 恵美)	4
	(2) 経営者の役割と従業員の役割 (担当：非常勤講師 湯沢 雅人)	6
	(3) 実践新商品企画 (担当：非常勤講師 湯沢 雅人)	8
	(4) 神奈川のみらい (担当：教授 為近 恵美 / 非常勤教員 湯沢 雅人)	11
	2. 大学院生へのキャリア教育 (副専攻プログラム)	13
	(1) イノベーションと課題発見Ⅰ (担当：教授 為近 恵美)	13
	(2) イノベーションと課題発見Ⅱ (担当：教授 為近 恵美)	14
	(3) 神奈川県を取り組む技術課題 (担当：教授 為近 恵美)	16
	(4) 博士進学与キャリアデザイン (担当：教授 為近 恵美)	19
	(5) 博士学生のためのキャリアデザインⅠ (担当：教授 為近 恵美)	19
	(6) 博士学生のためのキャリアデザインⅡ (担当：教授 為近 恵美)	20
	3. 講義以外の人材育成事業	21
	(1) YOYO カレッジ	21
	(2) シュタインバイス大学日本研修	23
	(3) 丸和育志会 奨学生	25
	(4) 横浜イノベーション研究会 企業学生交流会	27
	(5) AOKI 起業家育成プロジェクト	29
III.	ベンチャービジネス支援事業	32
	1. ベンチャー支援施策『フェーズⅠ』、『フェーズⅡ』	32
	2. ベンチャー支援採択者、センター支援者の活躍	33
	3. 他のベンチャー支援プログラムとの連携	35
IV.	ドクターキャリア開発事業	36
	1. 活動全般	36
	2. 企業と博士の交流会：キャリアパスフォーラム	37
	3. 各種イベント・セミナー	40
	(1) 博士限定！「企業研究所(レゾナック)見学会」	40
	(2) NTT 研究所見学会	40
	(3) 共催イベント	41

4. コンソーシアム活動	42
【添付資料 1】 シュタインバイス大学日本研修 報告書	44
【添付資料 2】 YNU 博士の進路・キャリア形成状況に関するアンケート (2024 年度)	48
【別表 1】 センター開講講義 受講者数まとめ	50
【別表 2】 ベンチャー支援事業 採択案件一覧 (2020 ～ 2025 年度)	51
【別表 3】 YOXO カレッジ／アイデア創出ワークショップ／スキルセミナー	52
【別表 4】 センター主催セミナー 参加者数	53
【別表 5】 センター主催 博士人材向けキャリアセミナー (学内限定) 参加者数	53
おわりに	54

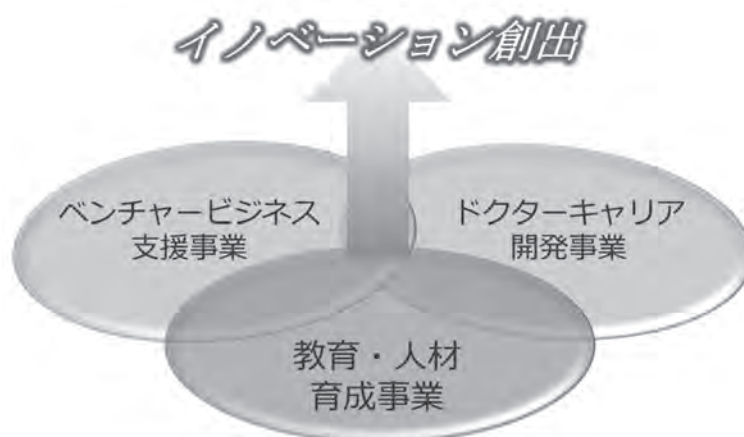
I. センター概要

「成長戦略教育研究センター」は、2011年に「企業成長戦略研究センター」と「ベンチャービジネスラボラトリー（VBL）」の統合により誕生した「成長戦略研究センター」を前身とし、2020年度より地域連携推進機構の下部組織として新しく生まれ変わりながら、文理融合を実践する教育研究組織としてイノベーション創出の拠点となるべく活動してきた。

現在は、イノベーション人材の育成を主なミッションとし、下記の3つの事業に取り組んでいる。

1. 教育・人材育成事業
2. ベンチャービジネス支援事業
3. ドクターキャリア開発事業

教育・人材育成事業によりイノベーション創出に資する起業家型人材を育成し、そこから生まれる学生ベンチャーを支援する。また、より多くの博士人材が社会で活躍できるようキャリア開発支援をすることで、高度なイノベーション人材を輩出し、これにより地域や社会に貢献することを目指している。



成長戦略教育研究センターの取り組む事業

【2025年度 センター所属教員一覧】

センター長	教授	中尾 航
センター専任教員	教授	為近 恵美
センター教員	非常勤教員	湯沢 雅人
センター教員	非常勤教員	山田 敏哉
センター教員	非常勤教員	勝木 信二
センター教員	非常勤教員	木内 恵子

II. 教育・人材育成事業

当センターでは起業家型人材の育成を目標に、学部や大学院での教育を行っている。学部生の起業家意識を醸成し、社会課題の解決のための起業を目指す人材や経営者目線で新しい事業分野を開拓できるような起業家型人材の育成のための科目と、大学院生向けには、より高度な知識をベースにした研究開発型イノベーション人材育成のための科目を提供している。特に当センターの役割として、将来のキャリアを広く意識し、幅広い視野を持つ人材を育てるという観点から学部生向けの全学教育科目として『アントレプレナー入門』、『経営者の役割と従業員の役割』、『実践新商品企画』、『神奈川のみらい』の4科目を開講した。また、より専門性の高い大学院教育においては、理系の大学院生を主な対象として、3シリーズ6科目を開講した。

1. 学部生へのキャリア教育

(1) アントレプレナー入門（担当：教授 為近 恵美）

「アントレプレナー入門」 春学期開講 木曜4時限、履修者 14名

【履修者のプロフィール】

	経済学部	経営学部	理工学部	教育学部	都市科学部	計
1年	0	0	8	0	0	8
2年	0	4	0	0	0	4
3年	0	0	0	0	1	1
4年	0	0	1	0	0	1
計	0	4	9	0	1	14

本講義は、成長戦略教育研究センターのミッションである起業家型人材育成のための体系的教育の一環として、全学部生を対象に全学教育科目として開講している。単に講義を聴くだけの受け身の授業ではなく、グループディスカッションやビジネスプランの作成といったグループワークを行う、参加型の授業（アクティブラーニング）を採り入れている。

なお、履修者数14名というのは、過去10年間で最も少ない。昨年度までは、280名ほどの履修希望者があり、倍率約4倍の受講調整を実施することとなったが、今年度は、木曜4限に開講時限を変更したところ、これまで履修希望者の多かった経営学部の必修授業と重なったことなどによる影響か、履修が激減する結果となった。

【講義スケジュール】

No	テーマ・講師	No	テーマ・講師
1	オリエンテーション、 起業に関する考え方アンケート	9	新規事業プランニング(4)：ビジネスアイデアを具体化する・中間発表準備
2	アントレプレナーシップとは？なぜ起業が求められるのか？	10	新規事業プランニング(5)：ビジネスアイデア中間発表
3	課題発見力講座（マイナビ）	11	起業家の話を聞く （エグゼクティブタ(株) CEO 多田洋史氏）
4	新規事業プランニング(1)：ビジネステーマを決める	12	新規事業プランニング(6)：ビジネスプランのブラッシュアップ
5	新規事業プランニング(2)：ビジネスアイデアを考える	13	新規事業プランニング(7)：ビジネスプランのブラッシュアップ・発表準備
6	課題解決からの起業 （ジョージ・アンド・ショーン(株) CEO 井上憲氏）	14	新規事業プランニング(8)：ビジネスプラン最終発表
7	新規事業プランニング(3)：ビジネスアイデアを絞り込む	15	まとめと講評
8	トレンドとマーケティング （トレンドユニオン 家安 香氏）		

講義の目的は、必ずしも実際に起業を目指す学生だけではなく、企業に就職する場合でも、組織の中で常にビジネスを意識し、経営者の視点で業務を遂行することのできる人材、それによりイノベーション創出に結び付けることのできる人材育成を目指している。講義の最初と最後に履修者にアンケートをとり、起業の意識の変化を追ったところ、いずれも起業志向が就職志向のほぼ倍となり、比率は変わらなかった。個人別にみても、初回到回答した志向を変更した学生はほぼおらず、無回答であった学生が起業志向と回答した。起業志向の学生についても、「学生のうちに起業したい」と回答した学生の割合が、2名(29%)から5名(56%)に増え、数・割合ともに増加した。これは、講義を受ける中で、早い段階から起業にチャレンジしたいという意識の変化につながったと考えられる。

(2) 経営者の役割と従業員の役割 (担当：非常勤講師 湯沢 雅人)

本授業は、「事業とは何か、企業は何故存在し、いかに機能し、経済活動においてどのような役割を果たすのか」といった企業に関する概念や企業活動の仕組みについて、企業を運営する経営者と業務を遂行する従業員の双方の視点で理解を深め、社会人として携えるべき知識・知恵を習得してもらうことを目指した。

労働力をもとに財やサービスを生産する企業は、社会における経済活動の主体として機能しているが、その詳細を経営学で議論されている枠組みで学ぶことで、経営者の視点で概念や理論を理解すると共に、企業活動の内容や様々な仕組みを知ることで、従業員の視点で実務を実感し、自身の職業観を固め、就職活動や将来のキャリア構想に役立てることを想定して講義テーマを編成した。

講義では、習得すべき事項を俯瞰、体系的に理解してもらうことを意識し、また授業で学んだことを踏まえ、実在する企業に当てはめて考察・分析を行なうことは、思考力や判断力を高めることの訓練になるため、事前課題および講義の振り返りにケーススタディを用いた。

今年度はオンデマンド型から対面型に変更して2年目となるが、授業の運営に際しては、昨年度の反省点に対処しながら挑んだ。また、終盤には昨年度と同様に横浜イノベーション研究会会員企業との交流の場を設け、授業で学んだことを踏まえ、実務におけるリアルな話題に触れることで、実践感覚を体感してもらうことを狙った。

開講曜日・時限が学部必修科目とバッティングしていたためと思われるが、専攻分野との親和性が高い経営学部生の履修はなく、履修者数は経済学部生 32 名、理工学部生 30 名、都市科学部生 3 名の総勢 65 名だった。

【講義テーマ】

- 1 インTRODクション(本授業の目的とゴール・全体の枠組み)
- 2 事業と企業経営
- 3 経営資源と事業ドメイン
- 4 バリューチェーンと組織機能
- 5 経営企画・事業計画機能の役割と業務
- 6 マーケティング機能の役割と業務
- 7 研究・開発機能の役割と業務
- 8 購買・生産・流通機能の役割と業務
- 9 営業・販売・サービス機能の役割と業務
- 10 組織管理機能(総務・人事・経理・法務)の役割と業務
- 11 事業の成果と財務評価
- 12 企業の社会的責任とSDGsへの貢献
- 13 企業との交流に向けた準備(個人ワーク)
- 14 企業との交流(グループに分かれての交流会)
- 15 イノベーションの本質

【履修者の分布】

	経済学部	経営学部	理工学部	教育学部	都市科学部	計
1年	30	0	25	0	3	58
2年	2	0	3	0	0	5
3年	0	0	1	0	0	1
4年	0	0	1	0	0	1
計	32	0	30	0	3	65

※上記に加えて国際教育センター所属の交換留学生1名が聴講

授業に対するアンケート調査の結果から、前述した講義の内容、および課題の設定を含めた進め方は、概ね狙い通りに機能したと思われる。

企業との交流に向けては、予めグループ編成をした上で、事前準備として、各社の情報を把握し、質問事項を整理すること(個人ワーク)に1コマを充て、交流の場に挑んでもらったが、履修者各々が気付きや学びを得られたようである。

【履修者の声(アンケート調査への回答より)】

- 経営の各機能がどのように連携し、社会に対して価値を創造していくのかを包括的に理解することができ、大変勉強になりました。[経済学部 1年]
- 企業の強みと弱みを分析する、といったように、経営者の視点で様々な物事を考えることができ、とてもためになる授業だった。[理工学部 数物・電子情報系学科 1年]
- 毎授業いくつかのキーワードをおっしゃってくれたり、吹き出し等スライドを解りやすく整理してくださったので、非常に理解しやすかったです。特に、第11回の授業では、財務諸表や貸借対照表について触れてくださり、自分が興味を持っていた内容なので非常に楽しかったです。[理工学部 数物・電子情報系学科 1年]
- 企業の組織的な話について興味を持っていたので、そこを取り上げて授業をして頂いてとても嬉しかったです。企業の部署毎の役割等、今後就職を考える際にも役立つお話を聴くことができ良かったです。[経済学部 1年]
- 講義資料に図が多く、経営に対して全く知識がない自分でも理解しやすい。[理工学部 数物・電子情報系学科 1年]
- 今まで「何となく」だった企業に関する知識を詳しく順を追って説明してくださったので理解が深まりました。企業交流会がとても面白かったです。[都市科学部 環境リスク共生学科 1年]
- 講義の内容が充実していた上に、企業交流会で志望した企業と建設的な対話を交えることができたことに満足できた。[理工学部 数物・電子情報系学科 1年]
- 実際に企業の方と話す機会があったことで、学んだ理論がより実感と結びつきました。[経済学部 1年]
- 人事や法務等普段目にすることがない仕事の組織的な機能や、企業の社会的意義について考え、知ることができた。企業との交流等を通して、これまでとは違った視点で社会を見ることができるようになったと思う。[理工学部 数物・電子情報系学科 1年]
- 企業の社会的責任については耳にしたことはありましたが、具体的にはあまり知らなかったなのでこの講義で理解が深まりました。[理工学部 機械・材料・海洋系学科 2年以上]

(3) 実践新商品企画 (担当：非常勤講師 湯沢 雅人)

本授業は、企業等において新商品を企画する際に必要となる知識やスキルを習得してもらうことを目的としている。そこで、戦略やマーケティングに関する経営学の基礎知識を交えながら、商品を企画・開発する手順を解説、さらに演習にて受講者がそのプロセスを仮想的に体験することで、学術的理論と実務を行き来しながら商品企画の要点を理解できる場を提供し、理論に裏付けされた新商品企画の遂行能力を育成することを目指した。

授業のコンセプトは引き続き「商品企画の楽しさや醍醐味の仮想体験」とし、昨年度の反省点に対処しながら5年目に挑んだ。

まず、前半の講義では、商品開発を取り巻く事業やマーケティングに関する知識をレクチャー、特に商品の企画・開発に不可欠なマーケティング・マインド、すなわち顧客を理解することの重要性と顧客価値を創造する際の着想法に重点を置いた。そして後半の講義では、商品の企画・開発プロセスを順を追って解説する一方で、履修者は並行して、各自が題材として設定した商品につき、講義で学んだ知識や手法を用いてそのプロセスをトレースする形で演習を進め、模擬的に実務を体感してもらった。

履修者数は341名で、その中で経営学部生が6割弱を占める195名、さらにその大半が1年生であった。経営学部では1年次から経営戦略論やマーケティング論を履修できることから、理論やフレームワークの解説が重複していたようだが、本授業では実例を交えた適用法として紹介しており、さらに演習にて各自のテーマに即して理論やフレームワークを使ってみることで、理解の深化や知識の定着に繋がるという効果があった。

また、経済学部生も96名と多くの学生が履修した一方で、都市科学部生は36名、理工学部生は14名と少数派に向かい、いずれもほとんどが1年生だった。尚、教育学部生の履修はなかった。

【講義テーマ】

- 1 インTRODクシヨN(本授業の目的とゴール・全体の枠組み)
- 2 事業およびマーケティングと商品の役割
- 3 顧客価値とは
- 4 商品開発プロセス
- 5 商品企画の手順
- 6 事業ドメインと環境与件
- 7 戦略の策定(市場・競合・自社分析と商品戦略)
- 8 顧客の理解
- 9 商品コンセプトの策定
- 10 価値創出の具現化①：仕様の検討と設計
- 11 価値創出の具現化②：開発とプロトタイピング
- 12 顧客へのデリバリー
- 13 商品企画に求められる体制
- 14 商品開発の成否の評価
- 15 まとめ：商品企画を円滑に遂行するための要点

【履修者の分布】

	経済学部	経営学部	理工学部	教育学部	都市科学部	計
1年	93	189	8	0	36	326
2年	2	1	4	0	0	7
3年	0	2	0	0	0	2
4年	1	3	2	0	0	6
計	96	195	14	0	36	341

授業に対するアンケート調査の結果から、前述した講義の内容、および演習を含めた進め方は、過去4年からの改善を試みた事項を含め、概ね狙い通りに機能したと思われる。

但し、他者との意見交換の場として履修者からも要望があるグループワークについては、履修者数からも取り込みが難しく、実施を見送った。

【履修者の声(アンケート調査への回答より)】

- 商品企画において良いアイデアを考えること以上に、何故その商品を作るのかを論理的に説明することの重要性を強く感じた。特に顧客理解や環境分析を踏まえた上で商品コンセプトを言語化するプロセスは、直感や思いつきに頼っていたこれまでの考え方を見直すきっかけとなった。[都市科学部 環境リスク共生学科 1年]
- 顧客に提供したい価値がどのようなプロセスを経て具体的な商品として形作られていくのかを体系的に理解することができた。特に印象的だったのは、「顧客価値」から直接商品を作るのではなく、一度「機能」に落とし込み、それを段階的に設計へと具体化していく点である。このプロセスを理解することで、商品としての「出来栄」は偶然生まれるものではなく、価値を起点とした設計の積み重ねによって決まるのだと実感した。[経営学部 1年]
- 実際の商品(車や日用品等)を用いた例から、自ら考案する商品の企画を練られ、とても生きた学びができた。また、先生自身が企業に勤められていたご経験から、自らの実体験をもって説明して頂き、毎回の授業がとても印象に残るものとなった。[都市科学部 都市社会共生学科 1年]
- 何気なく手にしていた商品がどのような経緯を経て私たちの元に届いているのかについて、具体的に、かつ専門性のある形で知ることができ、非常に実りのある講義であった。[経営学部 1年]
- 実際の事例をたくさん聴くことができ、勉強になりました。商品開発の成否の判断や、商品開発チームに求められる要素等、非常に専門的なレベルまで教えて頂き、企業の商品開発部の雰囲気疑似体験することができました。[経営学部 1年]
- 講義を通じて新商品の構想を練っていくのが面白かったです。自分には創造性がないからできないと思っていたことを、手順に則って進めていくことによってできたのが良かった。[経営学部 1年]
- 講義は常に楽しく受講できたということを強く強調したい。内容もとても面白く、量は多いけど、だからこそ楽しく受講できました。[経済学部 1年]
- 商品企画に関して考える要素を講義で学んだことで、買い物をする時や飲食店に行く時等日常生活でも考察をするようになった。毎日が学びの場になったという点で非常に意義深い講義だと感じた。[経営学部 1年]
- 日常的に授業内容を思い返せるような場面に何度も遭遇できて面白かった。[都市科学部 環境リスク共生学科 1年]

【担当講師からのメッセージ】

2021年度から5年間「実践新商品企画」の講義を担当させて頂きました。自身の専門領域である製品開発論で議論されているコンテンツを盛り込み、また実務家として現場で経験してきた事柄にも触れながら授業を形成し、母校で、後輩にあたる受講生の皆さんと接点を持ち、レクチャーするのは、とても楽しく、充実した時間でした。

ありがたいことに1,276名という多くの方々を受講頂きましたが、アンケート調査への回答を通して好意的な感想を寄せて頂いたことに授業を提供する立場として安堵し、また受講生の皆さんの反応から逆に私が気づきや学びを得ることも多く、励みややりがいを感じるメッセージを頂いたことも少なくありません。

商品企画に興味があって受講した方、受講することを通して商品の企画や開発に興味を持った方は、是非より深く学び、ご自身の考え方を固め、専門性を高めてもらいたいですし、そこまで興味を持っていない方にとっても、将来商品の企画や開発に直接携わることがないとしても、自身を取り巻く環境を分析し、顧客にあたる対象を理解し、価値を創り出すこと、その具現化を推し進めることは普遍的に活かせるスキルであり、仕事にしる、日常生活にしる、ひいては人生そのものにおいて、この講義で学んだ概念や考え方は必ず役に立つはずです。

いずれにしても、受講生の皆さんがそれぞれ学びを深める専門領域の中で、あるいは就職活動や社会人になってからの就業、さらには日々の生活の中で、この講義で学んだもらったことを少しでも役に立ててもらえれば幸いです。

最後に、私がこれまで取り組んできた研究活動と実務経験の集大成と位置付けられる場を提供頂けたことに感謝すると共に、学部在籍にて4年間、大学院在籍にて5年間、リサーチャーとして5年間、そして非常勤講師・教員として5年間、長きに渡ってお世話になってきた国大の一層の発展を願ってやみません。



(4) 神奈川のみらい (担当: 教授 為近 恵美 / 非常勤教員 湯沢 雅人)

本授業は、大都市と地方都市の両方の特性を有し、「日本の縮図」と言える神奈川県
の現状・課題と今後の取り組みについての理解と考察を深めることにより、地元神奈川や日
本における「みらいづくり」に果敢に挑戦できるように視座を高め、具現化に取り組む際
の着想法を習得してもらうことを目的としている。

横浜国立大学と神奈川県、小田原市、および南足柄市との各包括連携協定に基づき開講
される授業であり、実際に各領域で施策の検討や実施に取り組んでいる現職の職員の方々
を講師に招き、神奈川県および両市における課題と解決に向けた取り組みに関する具体的
な解説を通して、日本の地域社会の課題や解決に向けたアプローチ方法、SDGs に対する意
識を高めることを目指している。

一連の講義の内容は広範に渡るが、前段で神奈川県の概要、2040 年を展望した将来像や
県の政策の基本方向を示した「新かながわランドデザイン」について解説頂いた上で、
健康や福祉・保健衛生、産業の振興や地域活性化、教育、都市基盤整備、環境対策といっ
た身近なテーマの現状と課題、解決に向けた取り組みについて詳細にレクチャー頂いた。

さらに、「Vibrant INOCHI への道」なるテーマにて神奈川県知事・黒岩祐治氏に登壇頂
き、学生に直接メッセージを伝える機会を頂いた。

また、小田原市からはまちづくりの取り組み、南足柄市からはデジタル化への取り組み
についてそれぞれ紹介頂いた。

履修者数は 300 名で、学部必修科目との関係から経済学部生が少なく、逆に経営学部生
が 179 名を数え、学部間での偏りが見られたが、自然科学や工学を専攻する理工学部生、
教員を目指す教育学部生、まちづくりについて学ぶ都市科学部生にとっては親和性が高い
トピックが多く、履修者も程良く分散していた。

【講義テーマ】

- 1 インTRODakション(本授業の目的とゴール・全体の枠組み)
- 2 神奈川県の概要と将来の目指す姿
- 3 神奈川県の SDGs の取り組み
- 4 地元について考える
- 5 未病改善の取り組み
- 6 最先端医療の推進、未病の改善
- 7 地域コミュニティ創生の取り組み
- 8 Vibrant INOCHI への道
- 9 脱炭素社会の実現
- 10 ロボットと共生する社会の実現
- 11 とともに生きる社会かながわ憲章
- 12 神奈川のインクルーシブ教育の推進
- 13 生活困窮者支援の取り組み
- 14 小田原市のまちづくり
- 15 南足柄市のデジタル化への取り組み

【履修者の分布】

	経済学部	経営学部	理工学部	教育学部	都市科学部	計
1年	0	146	18	22	48	234
2年	0	20	4	0	8	32
3年	1	6	3	0	5	15
4年	1	7	4	3	4	19
計	2	179	29	25	65	300

講義の内容に応じて設定した問いかけに対し、履修者の見解を求め、講義の感想や講師の方へのメッセージと併せて、簡単なレポートとして提出してもらったが、講義を聴くことと自身の考えを巡らせることで授業が完結するスタイルを定着させることができた。

尚、今年度は択一式問題による期末テストではなく、期末レポートを課すことによって、履修者各々が考え、記述することを求めつつ、到達度を測り、評価に反映することを試みた。



2. 大学院生へのキャリア教育(副専攻プログラム)

学部生への教育に加えて、より専門性の高い大学院教育においては、以下に記す3シリーズ6科目を開講した。

まずは、理系の大学院生を主な対象として、将来イノベーション創出に貢献できる人材を育てるための教育として、社会の仕組みを知り、イノベーションや起業について考える機会を与える『イノベーションと課題発見Ⅰ』、次のステップとして、自らの研究シーズをビジネスに結び付けて考えさせる『イノベーションと課題発見Ⅱ』を開講した。2024年度までは、これら2科目に加えて、インターンシップ科目である『イノベーションと課題発見Ⅲ』(もしくは、『イノベーションと起業Ⅱ』、『都市イノベーションと起業Ⅱ』)を履修することで、副専攻プログラム「ベンチャービジネス」(起業家人材養成教育プログラム)として修了証を発行していたが、2025年度からは、募集を停止した。

また、神奈川県科学政策グループ(神奈川県政策局いのち・未来戦略本部室科学技術グループ)と連携して県が取り組む研究課題についての講義『神奈川県の取り組む技術課題』を開講し、理系人材に専門分野とは異なる領域の幅広い知識を身に付けるような教育を行った。

さらに、大学全体の中期目標・中期計画に基づき開講している博士課程後期生向けのキャリア科目『博士学生のためのキャリアデザインⅠ・Ⅱ』を、後述するYNU-SPRING副専攻の必須科目として提供した。

(1) イノベーションと課題発見Ⅰ(担当:教授 為近 恵美)

本科目は、主に理工系の大学院生を対象とし、自分の研究テーマを起点とした価値の創造とその事業化を構想することができる、ベンチャーマインドを持った起業家型人材の育成を目指している。価値創出のために起業や事業開発に取り組み、民間の第一線で活躍している実務家を講師に招き、社会の変化を的確に捉え、イノベーションの創出に繋がる論題をテーマとした講義(講演)による座学パートと、自ら考えて行動する力を培うためのグループワークにて課題解決プロジェクトを実施する実習パートに分かれる。

座学パートでは、講義を聴いた後に講師を交えた討論や自分なりのまとめを行い、講師にフィードバックするレポートを課した。

実習パートでは、実際の企業が提供する課題をテーマにして解決策を検討するプロジェクトを実施した。今年度は(株)マイナビが提供する「課題解決プロジェクト」コンテストにおいて設定された2つの企業の課題テーマについて、4チームに分かれて企画書の作成を実施した。各チームは、企業から提供された課題に対する思いを表した動画や独自に調査した結果などを踏まえてアイデア検討・議論を重ね、それぞれに解決策を立案し企画書にまとめ、最終発表を行った。プロジェクトを進める過程で、チーム内での方針の検討や異なる専門性からの議論、企画としてのまとめ作業などを通じて、自ら考え、学び行動する力をつけることができた。

【講義スケジュール】春学期 第1ターム 月曜4・5限

No.	4限(14:40~16:10)	No.	5限(16:15~17:45)
1	研究者からの起業 ～夢の実現のために～ 講師：動物アレルギー検査(株) 増田 建一 氏	2	オリエンテーション イノベーションと課題発見
3	新しい顧客価値、新しい領域の共創のために ～富士フィルムの事例～ 講師：design MeME(同) 小島 健嗣 氏	4	課題解決プロジェクト オリエンテーション 講師：マイナビ
5	多様性を活かし創造を生む 「すり合わせ文化と日本型能力主義」 講師：(株)湧志創造 堂免 恵 氏	6	グループワーク ～テーマ提案検討～
7	半導体技術の深化がもたらした ビジネス環境の変化 講師：アクセンチュア(株) 清水 健 氏	8	変化の時代 ～直面する変化の本質とそのインパクト 講師：(一社) DeruQui 中川 郁夫 氏
9	生成AI、XR技術がもたらすイノベーション 講師：(株)NTT ExC パートナー 南 賢造 氏	10	グループワーク ～テーマ提案検討～
11	着想の源泉について 講師：一橋大学 イノベーション研究センター 吉岡(小林) 徹 氏	12	課題解決プロジェクト 中間発表 講師：マイナビ
13	イノベーション概論 講師：オルバイオ(株) 代表取締役 CEO 山口 栄一 氏	14	グループワーク ～最終提案作成～
15	発表・応募書類作成		

尚、履修者数は15名であった(内訳：理工学府8名・都市イノベーション学府2名・環境情報学府3名・国際社会科学府1名・他大学院1名)。

(2) イノベーションと課題発見Ⅱ(担当：教授 為近 恵美)

本科目は、「イノベーションと課題発見Ⅰ」で学んだことを生かしながら、自分自身の研究分野(卒業研究のテーマなど)に関連した事業を構想し、ビジネスプランを策定することを目指している。履修者は、課題を解決することを起点とし、自身の研究テーマに関連した事業を立ち上げることを前提に、各回の講義を聴き、自分のテーマを掘り下げ、事業化のアイデアを検討した。

授業はベンチャー育成の専門家によるレクチャーと、演習・ワークおよびディスカッションを組み合わせて進め、履修者はビジネスプランを作る過程で逐次その進捗を発表、様々な角度・視点からアドバイスを受けて、話し合ったりすることでブラッシュアップを図っていった。

尚、2コマずつ8週間で開講するターム科目であるという時間的な制約を考慮し、課題を明確にした上でいかなる価値創りを目指すのかを明らかにすることに重点を置いて検討を進めてもらった。

【講義スケジュール】春学期 第2ターム 月曜4・5限

No.	4限(14:40~16:10)	No.	5限(16:15~17:45)
1	【イントロダクション&レクチャー】 事業と企業経営	2	【演習】 解決したい課題の発見 自分のミッションを考えてみる
3	【ワークショップ】 社会に目を向け、新たなテーマを発掘する	4	【演習】 現状調査と分析 自分のミッションをビジネスの視点から考える
5	【レクチャー】 顧客への価値提供	6	【演習】 事業コンセプトの設定 問題意識と課題を解決するための価値の創出
7	【全体討論】 他者とのディスカッションを通して 多面的に考えを巡らせる	8	【レクチャー】 理系研究職から“兼業起業家”へ：理系人財 キャリアの新たな選択肢(味の素社員の例) 講 師：合同会社ニュートリベース 佐藤 英明 氏
9	【演習】 ビジネスプランのブラッシュアップ① (与件整理～商品・サービスの具体化～デリバ リー法)	10	【全体討論】 ビジネスプランに関するディスカッション①
11	【レクチャー】 事業化とは 講師：(株) TNP パートナーズ 呉 雅俊 氏	12	【発表】 ビジネスプラン中間発表
13	【演習】 ビジネスプランのブラッシュアップ② (ビジネスモデル(収益構造)検討～販売戦略)	14	【全体討論】 ビジネスプランに関するディスカッション②
15	【発表】 ビジネスプラン最終発表		

今年度の履修者数は6名(内訳：理工学府5名・国際社会科学府1名)であったが、全員が個別のビジネスプランを作成し、最終報告会で発表した。紆余曲折はあったものの、全員が最後まで自分のやりたいこと、目指すことをビジネスの視点から考え抜いたことは、非常に意義あることと思う。

履修者が取り組んだテーマは下記の通り。

【学生が作成したビジネスプランのタイトル】

- ・ 新たな旅行先の提案と過疎地域の魅力再発見あるいはその地域の閉塞化防止
- ・ 国民負担軽減と再エネ普及を両立する施策
- ・ 「自立した移動の自由」の提供を通じた新しいモビリティ社会
- ・ 災害対策 - 未来型公衆電話で守る命と安心
- ・ 地方の地域経済の衰退
- ・ オーバーツーリズムの緩和に向けてー観光客を対象とする旅行情報プラットフォーム

最後に、十数年にわたりイノベーション人材の育成をめざして開講してきた本科目も、当センターの廃止をもって、今年度で終了する。Ⅰ・Ⅱ合わせて、毎年8~10名ほどの外部講師の方に講義をしていただいた。研究者としての夢の実現のために起業した方、この社会をよりよくするために、自身の技術や知識を基に起業する方、大企業に属しながらより大きなイノベーション創出のために新規事業を立ち上げる方など、様々な最先端人材の方々の講義は、大学院生にとっては、大変刺激的な内容だった。履修生達からは、こんな授業をもっとたくさん受けたかった、とか、より多くの学生に聞かせたい、などの感想をいただいた。

これまで、講義をしてくださった講師の方々に感謝いたします。

(3) 神奈川県を取り組む技術課題（担当：教授 為近 恵美）

本講義は、神奈川県（自治体）と連携して、県が取り組む技術課題・研究課題を理系学生にわかりやすく解説するものである。これにより、首都に隣接して研究開発機関などの多い神奈川県の特徴ある産業や技術に対する理解を深めるとともに、自身の専門分野と社会とのつながりを意識させ、学生自らが卒業後の進路について考える際に役立てることを目的としている。

特に自分が学ぶ神奈川県という地域には、どのような技術的な課題があり、どのようなアプローチでこれを解決するための研究を行っているのかを知ることで、何故、その研究が必要なのかという点を意識させる。最も重要なのは、これを通じて、自分自身の研究テーマについても、その社会的意義や位置づけを考える力を身につけさせることである。実社会に役立つ研究とはどのようなものかを知ることで、自身の大学院での研究テーマがどのようにしたら社会に還元できるのかを考えて、自らの研究テーマを俯瞰し、社会実装に結び付ける力を身につけるよう指導している。

毎回の講義では、感想レポートを書かせ、講義内容を自分の頭で反復整理し、研究内容が社会でどのように役立つのか、自分の研究分野との接点はないかなどを考えさせるようにした。この形式は、これまでも行ってきたが、講師の方にもフィードバックしている。また、最終的に県の課題に対する提案とその提案内容を実際に実証するための研究計画を立案することをレポート課題とした。

今年度も昨年度と同様に対面開講とし、10回の講義と5回分を2度に分けて行う現地実習という形で行い、実際に KISTEC（神奈川県立産業技術総合研究所@海老名市）および自然環境保全センター（厚木市）を訪問して見学・実習を行った。また、実習日に参加できない学生への対応として、代替実習を設定した。今年度の履修生は昨年度より大幅に増え、学部4年の先取り履修の学生3名を含む、25名であった。

【講義スケジュール】 秋学期開講 火曜 3 時限 履修者 25 名 教室：理工 A-101

No.	日程	内容	担当
1	10/7(火)	オリエンテーション	いのち・未来戦略本部室／ 成長戦略教育研究センター
2	10/14(火)	講義：環境科学センター	環境科学センター
3	10/21(火)	実習相当回のため休講	-
4	10/28(火)	講義：農業技術センター	農業技術センター
5	11/4(火)	講義：畜産技術センター	畜産技術センター
6	11/11(火)	実習相当回のため休講	-
7	11/18(火)	講義：産業技術総合研究所 (KISTEC)	産業技術総合研究所 (KISTEC)
8	11/25(火)	講義：水産技術センター	水産技術センター
9	12/2(火)	講義：衛生研究所	衛生研究所
10	12/9(火)	講義：温泉地学研究所	温泉地学研究所
11	12/16(火)	現地見学・実習：産業技術総合研究所 (KISTEC)	KISTEC 海老名本所
12	1/6(火)	実習相当回のため休講	-
13	1/13(火)	現地見学・実習：自然環境保全センター	自然環境保全センター
14	1/20(火)	特別講義	NTT 横須賀研
15	1/27(火)	最終回 まとめ	いのち・未来戦略本部室／ 成長戦略教育研究センター

【代替実習】

No.	日程	内容	場所
1	11/13(木)～ 21(金)	KISTEC Innovation Hub	産業技術総合研究所 (KISTEC) (海老名・横浜・殿町)
2	11/15(土)	理化学研究所 横浜キャンパス 一般公開	理化学研究所 横浜キャンパス (横浜市鶴見区)

履修者：理工学府：博士課程後期 2 名、前期 17 名、先進実践学環：修士課程 3 名、理工学部：4 年 3 名（先取り履修）。

受講後のアンケートでは、本授業を履修したきっかけとして、約半数が、先輩・友人から勧められた、と回答しており、学生から好意的に受け止められていることがわかった。

また、履修の理由として、「自身の研究の意義の位置づけを確かめることを期待して」や、「神奈川に何かがあるのか全く知らなかったため、もう少し神奈川についての知見を得たいと思ったから。」といった理由に加えて、「実習を通して実際に研究機関を訪問できることや、研究機関で働く方から直接お話を伺える機会があると知り、座学だけでは得られない実践的な学びが得られると感じたため履修しました。実際の研究現場や研究者の視点に触れることで、自身の専門分野への理解を深められる点に魅力を感じました。」など、実習を行うことが高

く評価されていることがわかった。この授業を取ってよかったか、という質問に対しては、「大いに意義があった」：63%、「おおむね役に立った」：37%で両者含めて100%となり、「あまり役に立たない」や「どちらでもない」と回答した学生はゼロだった。全体的な感想として寄せられた意見をいくつか紹介する。

「現場の意見や知識を知る貴重な機会となりました。普段専攻の異なる研究に触れる機会は少ないので、将来研究を希望する者として、研究そのもののあり方を考えさせられました。今後もこのような講義があれば参加したいと思います。」

「環境・医療・産業など幅広い分野を対象に、地域が直面する社会課題を現場に近い視点から解決しようとしている点に大きな意義があると感じました。大学や企業、自治体が連携することで、研究成果を机上の知識にとどめず、社会実装へとつなげやすい仕組みが構築されている点も魅力です。また、地域課題を起点とした技術開発は、研究テーマの目的や価値を明確にし、研究者自身が社会との関わりを意識する良い機会になると感じました。研究者として地域社会に貢献する姿勢の重要性を学び、今後は自分の研究にもこの視点を取り入れていきたいと思いました。」

「神奈川県が誇る技術や知的財産を垣間見ることができた。研究や就職活動で考えが凝り固まりがちな時期だが、専門とは少し離れた話題に触れ見識を広めることができた。就職活動でも広い視野を持って企業探しができるようになり、良い影響が出ていることが実感できている。」

「本授業を通して、大学での研究と社会とのつながりを具体的にイメージできるようになりました。実習や研究機関の方による講義を通じて、研究がどのように社会課題の解決に活かされているのかを知ることができ、非常に有意義でした。また、専門分野の知識だけでなく、それを分かりやすく伝える重要性も実感しました。本授業で得た視点や経験を、今後の研究活動や進路選択に活かしていきたいと考えています。特に印象に残っているのは、自然環境保全センターでの実習です。自分の専門とは異なる分野ではありましたが、無花粉スギや無花粉ヒノキといった、自身の生活にも身近なテーマについての実際の調査や研究内容に触れることで、新たな視点や学びを得ることができ、研究の社会的役割について改めて考えるきっかけとなりました。」

以上、大学院生に対して専門外の授業を提供することや、多様な分野の研究テーマを紹介することで、視野を広げることに役立ち、かつ実習を通して体験することなどに意義があると感じ、次年度以降も開講していきたいと思う。

(4) 博士進学とキャリアデザイン (担当: 教授 為近 恵美)

第4期中期計画に則って令和5年度に新規開講したキャリア科目『博士学生のためのキャリアデザインⅠ』(博士課程後期生対象)の開講にあたり、博士課程前期(修士)生への展開の要望を受け、同じ内容を博士課程前期生向けに『博士進学とキャリアデザイン』として同時開講することとした。内容の詳細は、次の項目(5)、(6)で述べるが、前期生に対しては、博士課程後期進学後の様々なキャリアを提示することで、博士進学へのハードルを下げ、より多くの優秀な人材が博士進学することを狙いとしている。

履修者:理工学府:修士6名、環境情報学府:修士26名、計32名。

(5) 博士学生のためのキャリアデザインⅠ (担当: 教授 為近 恵美)

博士学生が、大学院で身につけた知識や研究力を活かして社会で活躍するべく、学生自らが自身のキャリアパスについて考えるために役立つことを目的として開講している。

具体的にまずは、博士進学によって拓けるキャリアパスは、大学などのアカデミアに限らず、国立や県立などの公的研究機関や企業の研究開発部門、自分の研究成果をシーズとしたスタートアップの起業など様々な進路があることを知らしめ、キャリア理論などを学んで自身のキャリアに対する考え方を整理する。博士の就職活動についての専門家からの講義の後、博士を採用する企業や団体から外部講師を招いて、実際に社会で活躍する博士の話や求められる博士の人物像などの話を聞き、自分のキャリアについて、深く考えるきっかけとしている。

【講義スケジュール】春学期第1ターム 水曜4時限 教室:理工 A-105

No.	日程	内容	担当
1	4/9(水)	科目ガイダンスとキャリア全般	為近
2	4/16(水)	博士キャリアの現実と就職戦略	(株)エマージングテクノロジーズ 深澤氏
3	4/23(水)	学振DCとアカデミアポスト	東京大学 助教 小林氏
4	5/7(水)	企業における研究開発と求める研究者像(1)	NTT(株) 田中氏
5	5/14(水)	企業における研究開発と求める研究者像(2)	京セラ(株) 三品氏
6	5/21(水)	企業における研究開発と求める研究者像(3)	海上技術安全研究所 木村氏
7	5/28(水)	企業における研究開発と求める研究者像(4)	(株)レゾナック 瀬戸氏
8	6/4(水)	まとめと課題フィードバック	為近

履修者:理工学府:17名、環境情報学府:22名、国際社会科学府:4名、都市イノベーション学府:3名、計46名。

(6) 博士学生のためのキャリアデザインⅡ (担当: 教授 為近 恵美)

本講義は、その前段となる『博士学生のためのキャリアデザインⅠ』を履修した学生が、その続きとして履修する形をとっており、博士課程後期生だけが履修可能となっている。

まずは、Ⅰで学んだことを活かして、キャリア選択のための自己分析を行い、自身のキャリアについて、より深く考える機会を提供する。その後、博士に必要なジェネリックスキルとして、知財マネジメント、交渉学、プレゼンテーションの技法などを学び、後半では、前半の講義を活かして、自分の研究テーマを専門外の人にもわかりやすく説明し、自己アピールをするプレゼン演習を行う。特に、自身の研究テーマの意義、位置づけなどを意識して、最終的にどのように社会に還元できるのかという視点を重視して、プレゼンを作成してもらう。このプレゼン演習は、自分のプレゼンだけでなく、他者のプレゼンを聴いて質問する訓練にもなる。また教員だけでなく、学生が互いにコメントしあうことで、互いに理解を深め、高めあうことにもつながり、就職の際の面談にも役立つものである。加えて、別の章で述べる博士学生のためのキャリアイベント『キャリアパスフォーラム』に参加する際のポスタープレゼンの準備にもつながるものである。

尚、この講義は、前段の『博士学生のためのキャリアデザインⅠ』と合わせて、YNU-SPRING 学生の必修科目に認定されており、SPRING 採択学生は、後期1年次に履修することを前提としている。

【講義スケジュール】 春学期第2ターム 水曜4時限 教室: 理工 A-105

No.	日程	内容	担当
1	6/11(水)	ジェネリックスキルを身に付ける1(交渉学)	東京富士大学 隅田氏
2	6/18(水)	ジェネリックスキルを身に付ける2(知財マネジメント)	研究推進機構 山本氏
3	6/25(水)	ジェネリックスキルを身に付ける3(プレゼンテーションの技法) / キャリア選択のための自己分析 part1	勝木
4	7/2(水)	自分の研究テーマを説明する(プレゼン演習1)	為近・勝木
5	7/9(水)	自分の研究テーマを説明する(プレゼン演習2)	為近・勝木
6	7/16(水)	自分の研究テーマを説明する(プレゼン演習3)	為近・勝木
7	7/23(水)	自分の研究テーマを説明する(プレゼン演習4)	為近・勝木
8	7/30(水)	キャリア選択のための自己分析 part2 まとめと課題フィードバック	為近

履修者: 理工学府:17名、環境情報学府:20名、国際社会科学府:4名、都市イノベーション学府:2名、計43名。

3. 講義以外の人材育成事業

(1) YOYO カレッジ

2021 年度に採択された科学技術振興機構 (JST) 社会還元加速プログラム (SCORE) 大学推進型 (拠点都市環境整備型) 事業の一環として、「ALL 横浜街ごとキャンパス (YOYO カレッジ)」事業の中で社会人向けに起業関連講座を開講した。

翌 2022 年度からは、SCORE 事業を自立的に継承する形で、横浜未来機構の主管で横浜市 の 4 大学 (横浜国立大学、横浜市立大学、神奈川大学、関東学院大学) が協力して、起業家・イノベーター養成講座を提供するためのプラットフォームとして「YOYO カレッジ」を立ち上げ、現在も運用している。JST 補助金事業の終了後、2024 年度までは横浜未来機構からの委託を受けて 10 回～15 回の起業関連講義を開講していたが、立ち上げから 5 年目となる今年度は、機構からの委託がなくなったため、テーマの枠を広げて、大企業の新規事業やこれからの社会が必要とする事業等バラエティ豊かな講義内容を企画し、下記の 5 講座を提供した。

【開講日程】

日程：2025 年 11 月 12 日 (水)～2026 年 1 月 27 日 (火)

【提供講座と受講者数】

4 講座、全 5 回の講座に、延べ 51 名の受講生が参加した。

	開催日	講座タイトル	申込者数	受講者数
第1回	11/12	企業の利益率を考える 「半導体産業の利益率はどうして高いのか？」	14	9
第2回	11/18	第1回：自動車産業と比較してみる 第2回：固定費型企業の価格戦略と内製・外注の判断ポイント 講師：近藤 誠一 (株式会社レゾナック フェロー)	16	11
第3回	12/2	今注目の宇宙ビジネスの起業を知る 「世界は変わるよ。君らはどう未来を創る？」 ～大企業エンジニア兼スタートアップ社長、宇宙から世界を変えにうろついてます～ 講師：高井 智宏 (株式会社宙Lib 代表取締役/株式会社デンソー 先端技術研究所 担当次長)	18	9
第4回	1/14	大企業における新規事業開拓 「ゼネコンが考える未来構想」 ～荒唐無稽な発想からビジネスチャンスを探る～ 講師：赤川 宏幸 (株式会社大林組 技術本部 未来技術創造部長)	18	10
第5回	1/27	大企業のビジネス戦略から学ぶ 「エンタメ × テクノロジーの挑戦」 講師：野本 和正 (ソニー株式会社 技術開発研究所 Technology Fellow)	25	12
合計			91	51

【実施状況】

11月～1月の3ヶ月にわたり、外部講師による講義を行った。受講者には多様な切り口から、ビジネスによる価値創造に関わる知見や取り組み姿勢を伝えることができた。例年、本学とは関係のない一般社会人、地域の起業希望者などが中心だったが、今年度は、必ずしも「起業」というキーワードにこだわらなかったためか、本学の教職員や学生の参加も多く見受けられた。

受講後のアンケートには、全講座を通して34件の回答を得た。受講者それぞれが興味を惹かれた事項を具体的に挙げており、「勉強になった」「実践に役立つ」といったポジティブなコメントを多数頂いた。

【まとめ】

今年度は統一テーマを設けず、主に大企業における新規ビジネスや新たな価値創造の取り組み、また現状を取り巻くビジネス戦略立案に関わる実践的な内容を中心に深掘りするセミナーを行った。

受講後アンケートからは概ね好評であったことがうかがえた。大学提供のセミナーということで、アカデミックな内容を期待する声に応えるものから、自らの起業や新規事業検討に実践的で役に立つ知識やスキルに関する内容を求める声に対しても好意的な評価をいただき、幅広いニーズに応えるセミナーシリーズを提供できたのではないかと考える。

(2) シュタインバイス大学日本研修

シュタインバイス大学 The School of Management and Technology MBE (Master of Business and Engineering) 日本研修の狙いは、課題提供企業から出された海外進出などに関するリアルタイムの経営課題に対して、日独共同のチームで具体的な解決策を提案するグループワークに取り組むことで、国際的なチームワークを疑似体験するとともに、異文化間コミュニケーション・交流を実践する機会とすることである。グローバルな研究者として継続的に活動をするには、サイエンスの知識だけでは不足であり、本研修では経営学の戦略・マーケティングの知識とスキルも磨くことが出来る。本研修は、毎年夏期（本研修9月）、冬期（本研修3月）の2回開催されている。

コロナ期間中はオンラインでの開催であったが2025年度は昨年度と同様、前半のオンラインに加えて、後半は対面での開催となり、ドイツ側メンバーが来日し日本側メンバーと交流して、ケーススタディに取り組んだ。

日本側は東京農工大が中心となり、本学含む複数の大学が協力して日本チームを形成している。本学からの参加者は当センターが募集取りまとめを行っており、夏期に1名（環境情報学府 M2: 1名）が参加、冬期の参加はなかった。以下に夏期プログラムの概要を示す。

【プログラム概要（2025年度夏期）】研修期間は7月下旬から9月下旬まで

- ・キックオフ（7月23日）：全体スケジュールの確認と日本側メンバーの自己紹介など
- ・事前研修（8月下旬に5回）：技術系に不足するビジネス分析手法や企業戦略の枠組みを e-learning 等で学ぶ
- ・本研修（9月1日～12日）：グループワーク及び最終プレゼンテーション
- ・フィールドトリップ（9月7日）：東京周辺の企業の One-Day Tour を各チームで企画・実施する。
- ・事後研修（9月26日）：研修成果や反省点の共有

シュタインバイス大学日本研修（2025年度夏期）日程



【本学からのこれまでの参加実績】

年度	夏期	冬期	計
2017	3	—	3
2018	—	5	5
2019	3	1	4
2020	4	2	6
2021	0	2	2
2022	2	0	2
2023	2	2	4
2024	3	1	4
2025	1	0	1

※ 2017 年は夏の 1 回のみ開催。2018 年夏は、東京農工大の単独実施のため本学からの参加はなし

※ 添付資料として、巻末に今年度の研修に参加した学生の報告書を掲載する。

(3) 丸和育志会 奨学生

公益財団法人 丸和育志会が運営する奨学生制度「自己開発チャレンジ奨学金」の受け入れを2024年度より開始し、昨年度2名、今年度1名が奨学生として採用された。

本奨学生制度は、将来を担う人材を育成することを目的とし、社会貢献に対する意識が高く、そのための自己開発に意欲を持つ学生の挑戦を支援、指定校制により運営されている。

本プログラムを受け入れるにあたり、学務・国際戦略部 学生支援課が統括する奨学金制度の全学公募スキームをカバーする役割で当センターが学内選考に関与する体制を敷いた。4月初旬より学生からの応募を募り、書類および面談によって学内推薦の対象者を選考、丸和育志会に提出し、選考委員による書類およびプレゼンテーション(オンライン)での選考を経て採用が決定する。その後12月に開催される「丸和奨学生証授与式」にて正式な採用となり、それぞれの自己開発計画に基づいて活動を開始する。活動期間は翌年度末までで、年度末に開催される「自己開発計画実施報告会」でその成果を発表するという流れとなる。

2023年度に育志会から打診頂き、翌2024年度に本学での推薦を開始した本制度であるが、今年度末に当センターが廃止されることによって学内選考および学生を指導する体制の維持が困難であると判断し、本制度への参加は今年度をもって終了することとなった。

【「自己開発チャレンジ奨学金」概要】

[趣旨]

将来の日本と世界を担う人材の育成を図り、特に、社会貢献の高い志を持ち、個人・組織・社会の健康/健全性の実現、自己の知力と人間力向上意欲の強い奨学生を選考し、本人の自己開発チャレンジに資する奨学金を授与する

[応募資格]

上記の趣旨に賛同する学生で、原則として以下の条件を満たす者

- ・丸和育志会指定大学学部生及び大学院前期課程(学部4年生・大学院2年生は除く)で、有能な社会人に成長したいという意欲が強く、将来社会で活躍するため在学中に自己開発計画を実施しようとする志を持つ学生
- ・日本国籍を有する者
- ・他の奨学金制度との併願及び併用可 また卒業後の就職等に関する条件は特になし

[合格者数と給付額]

本奨学金は、本人提出の自己開発計画実現費用として給付

合格予定者(全体)：12名 奨学金給付額：50万円/人 給付型(返済義務なし)

[自己開発計画と選考基準]

本奨学金を活用し有能な社会人に成長するため、在学中に是非やってみたい、経験してみたいと強く思うことを、自由な発想で企画し自己開発計画書を作成すること

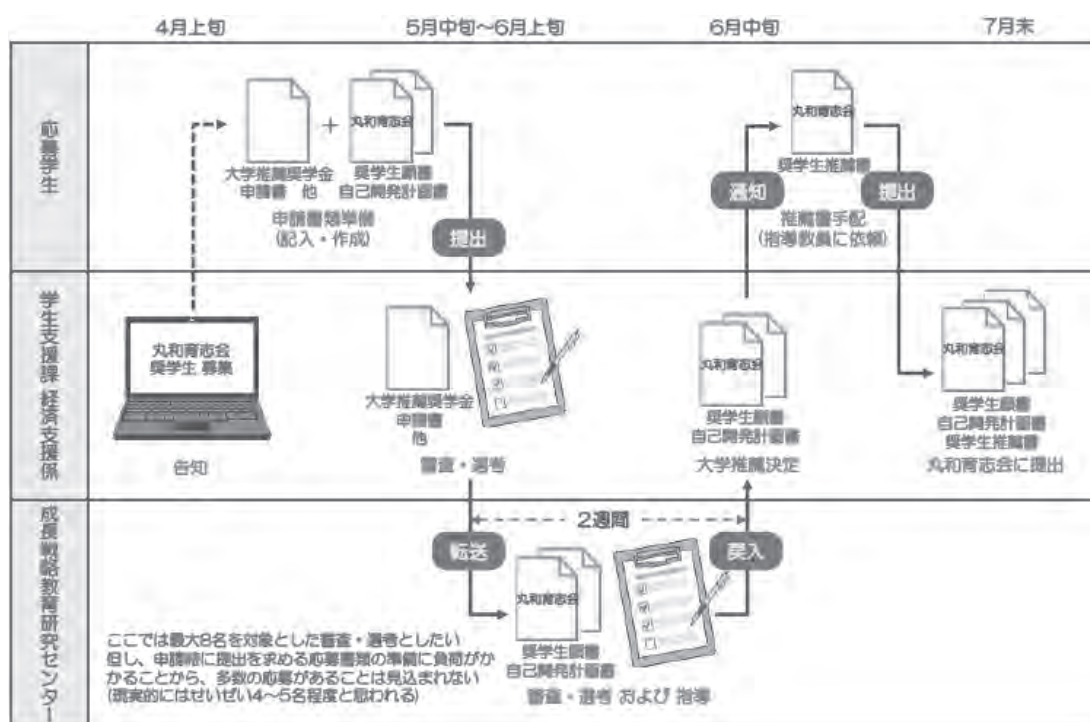
選考基準は、下記の通りとする

- ① 自己開発計画の行動スケジュールの具体性
- ② 自己開発計画に対する本人の思いの強さおよび志

【本学から奨学生として採用された学生の自己開発テーマ】

年度	所属	学年	テーマ
2024	都市科学部 建築学科	2年	人のつながりを生み出す場を形にする建築家になるための知識の習得と考への醸成
	都市イノベーション学府 都市地域社会専攻	修士 2年	南米エクアドル先住民による地域開発現場での実践と研究
2025	都市科学部 建築学科	2年	地域・まちのために活動する建築家を目指して

【参考：応募手続きフロー】



「自己開発計画実施報告会」での発表風景

(4) 横浜イノベーション研究会 企業学生交流会

「横浜イノベーション研究会」※の会員企業と本学学生が交流し、各社の事業の紹介や経営に関する解説を起点とした対話の機会とするための「横浜イノベーション研究会 企業学生交流会」を昨年度に引き続き開催した。

当センターが提供している全学教育科目「経営者の役割と従業員の役割」の授業の一環として開催したが、一定数の参加者を見込めることに加え、学生にとっては授業で学んできたことを踏まえ、関心事の深掘りや疑問点の解消を図る場と位置づけることで、目的意識を持って交流会に参加してもらうことができた。

※ 横浜・神奈川に拠点を置く企業・各種団体と本学が集い、地域に新たな提案を行い、その実現に向けて互いに知恵を出し合う場として2019年3月に設立された

【「横浜イノベーション研究会 企業学生交流会」開催要項】

[目的・狙い]

会員企業と横浜国立大学の学生が対話する機会を設け、相互の理解や関心事の共有、疑問点の解消等を行い、双方の参加者各々が気づきや学びを得られる、有益な時空間を演出する

[開催日時]

2025年7月17日(木) 13:00～14:30 [3時限]

[開催場所]

横浜国立大学 常盤台キャンパス
経済学部1号館(N4-1) 3F 308・309・310・314・317ゼミ室)

[参加学生]

「経営者の役割と従業員の役割」の履修者
(全学教育科目のため、経済・理工・都市科学の各学部生が混在)

[参加企業]

株式会社 アルプス技研
タカネ電機株式会社
株式会社 テクノステート
ネットチャート株式会社
株式会社 横浜銀行

【グループ編成・参加人数と当日の様子】

企業名	参加人数 (企業)	参加人数 (学生)
株式会社 アルプス技研	2	12
タカネ電機株式会社	1	11
株式会社 テクノステート	3	11
ネットチャート株式会社	2	12
株式会社 横浜銀行	2	13

開催に際しては、予め学生を参加企業毎のグループに編成し、事前学習として、各自が収集した参加企業の諸情報とこれまで授業で学んできたことを重ね合わせ、関心事項や疑問点の抽出および整理に取り組んでもらった。

当日は、グループ毎にゼミ室に分かれ、車座にて12～15名で交流に取り組んだ。各グループのファシリテーションは参加企業にお願いし、経営方針、技術や製品・サービス、それらの差別化要素、将来に向けた課題認識等を解説頂く中で自社のプレゼンスをアピールして頂くと共に、学生にとって有用な、経済活動や企業運営に関する理解の深化、職業観や将来像の構想、就職活動の方向性の検討、社会に出てからの実践の場での利活用に繋がる示唆やアドバイスを頂いたが、学生からも活発な質問がなされ、また企業にとっては現代の若者の関心事や意識、感性等を把握頂く機会になる等、双方にとって有意義な場となった。



(5) AOKI 起業家育成プロジェクト

起業家が育ちにくいと言われる日本において、頭も心も柔らかい中学生を対象に起業家教育を行い、将来国内外で活躍する実業家を育成することを目指し、公益財団法人 AOKI 財団は 2016 年より特別プログラム「AOKI 起業家育成プロジェクト」を実施している。当センターでは、プロジェクトの運営を受託している Space BD 株式会社との連携を発端とし、下記の通り「特別講座」を開講することでプロジェクトに参画、多様なコンテンツを提供してきた。

第 2 回：2017 年 8 月 17 日(木)～23 日(水)

第 3 回：2018 年 8 月 22 日(水)～25 日(土)

第 5 回：2022 年 11 月 13 日(日)

コロナ禍の影響によるオンラインでの実施によって第 4 回は参画せず、第 5 回からは単日開催にて対応しているが、今年度は昨年 7 月より進行中の第 6 回プログラムに参画、本学における特別活動の企画から運営全般までを担当した。

【「AOKI 起業家育成プロジェクト」(第 6 回)全体の概要】

開催期間：2024 年 7 月～2025 年 12 月(年度を跨ぐプログラム)

応募資格：横浜市在住または横浜市内の公立私立中学校に在学中で、

以下の条件を満たす中学生(1～3 年生)

- ・ 本プロジェクトの趣旨に賛同し、高い志を持ち、社会に貢献できる起業家を目指す生徒
- ・ 全日程に参加できる生徒
- ・ 保護者に同意頂ける生徒

募集人数：12 名

プログラムの特徴：

- ・ ビジネス知識に限定されない汎用的能力や起業家精神の育成
- ・ 少人数チームでのビジネス企画
- ・ 産学だけでなくインターンシップ・海外視察などの実践的体験

主催：AOKI 起業家育成プロジェクト実行委員会

特別後援：公益財団法人 AOKI 財団

後援：横浜市教育委員会

横浜国立大学 地域連携推進機構 成長戦略教育研究センター

一般財団法人 神奈川県私立中学高等学校協会

協力：Space BD 株式会社(運営事務局)

【本学が提供する「特別活動」の企画および実施内容】

実施時期：2025年6月15日(日)

対象：AOKI 起業家育成プロジェクト採択の中高生 12名

《企画段階での要点に据えた事柄》

当該プロジェクトの特別活動を横浜国立大学で開催することの意味を根底に置きながらプログラムの内容を検討すべきとした。そこで、プロジェクト・メンバーである中高生にとっては、大学がどのようなところなのかを知る機会となり、また進路の検討に向けた興味喚起に繋がることも視野に入れて企画した。一方で、本学にとっては、プレゼンスを示す場とすることを目指した。

主題：社会的価値の創出に向けて大学が担う役割

プログラムに対する基本的な考え方：

一義的には研究および教育の場とされる大学が、社会貢献を視野に入れながら、新たな価値を創り出すためにどのような取り組みを行なっているのかを伝え、社会課題を解決する際のフォーメーション例を示す

コンセプト：横浜国立大学発のケースを用いて、大学が担っている役割と取り組みの具体例を解りやすく伝える

《「特別活動」プログラム》

	開始	終了	内容	場所
1	9:30	9:35	オープニング	理工学部講義 A102 講義室
2	9:35	10:00	講義：未来社会とイノベーション(為近)	↓
3	10:05	10:35	講義：ビジネスにおける価値創造(湯沢)	↓
			休憩・移動	
4	10:45	11:35	VR体験：クレーン・シミュレータ、VRマップ	理工学部講義棟 A101 講義室
			休憩・移動	
5	11:40	12:25	ワークショップ：デザイン思考(山田)	↓
			移動	
6	12:30	13:20	ランチ	講義棟ロビー付近
			移動	
7	13:30	14:10	博士起業家講義・ラボツアー： 横浜バイオテクノロジー株式会社(小倉氏)	総合研究棟
8	14:10	15:00	大学発ベンチャー・ラボツアー： UNTRACKED 株式会社(島研究室)	↓
			移動	
9	15:10	15:30	起業家講義： ディアベリー株式会社(渡辺氏)	理工学部講義棟 A102 講義室
10	15:40	16:40	ビジネスプランピッチ&フィードバック	↓
11	16:40	17:00	クロージング：参加者の感想を共有	↓

前夜から降っていた雨も引率スタッフを含めた来学者が到着する頃にはあがり、受講生である 12 名の中高生(活動 2 年目となり進級しているため)が終日プログラムに取り組んだ。

まず、大学の講義を体感してもらうことも狙い、イノベーションやマーケティングをテーマとした模擬授業を受講した。その後学生・院生による VR 体験(クレーン・シミュレータおよび VR マップ)で技術の利用を体感、デザイン思考のワークショップでは、「学校をもっと楽しくするには」をテーマに、共感・問題定義・アイデア発想・プロトタイプ作成・テストという 5 つのステップを実践的に体験してもらった。

昼食時には、VR 体験に対応してくれた学生・院生が待機してしてくれたため、受講生との対話の場が生まれ、受講生にとっては歳が近い学生・院生との交流を深める機会となった。

午後のセッションはラボツアー。横浜バイオテクノロジー株式会社・小倉さんからは、植物病医学・植物遺伝子工学の専門知識を活かし、「農薬」や「遺伝子組み換え」に関するリスク学の視点からの科学的根拠に基づいた評価の重要性について、UNTRACKED 株式会社の島研究室の助教・学生の皆さんからは、機械学習を用いた制御技術、手の動きを模倣する機械の研究や、傷の写真から重症度を診断するスマートフォンアプリの紹介に加え、電気信号による運動制御の仕組みについて、それぞれ説明を受けた。

6 名ずつの二手に分かれ、研究室を相互に訪問、デモを含めて詳細の説明を受けたが、受講生からも活発な質問が続き、予定時間の超過を気にしなければならなかった。

講義室に戻り、学生ベンチャー支援事業フェーズ I の OB であるディアベリー株式会社・渡辺さんより「一度しかない人生をどう生きるか」をテーマに講話を聴き、最後に受講生がチームに分かれて検討してきたビジネスプランのピッチを実施して、1 日のプログラムを終了した。

この研修を通じて、大学という研究環境での最先端技術との接触、実際の起業家との対話、そして自らのビジネスアイデアの外部評価という経験を通し、学術研究と社会実装の架け橋となる起業家精神を育む実践的な学びの場となったことを祈りたい。



Ⅲ. ベンチャービジネス支援事業

1. ベンチャー支援施策『フェーズⅠ』、『フェーズⅡ』

近年、文科省や経産省ではイノベーション創出のための起業推進の取り組みもあり、大学発ベンチャー促進の機運が高まっている。当センターでは、大学の研究シーズに基づく起業だけでなく、社会課題をビジネス手法に基づいて解決する社会起業も含めた、社会のニーズに対応できる大学発ベンチャーの育成・支援を目指している。一方で、ここ数年、研究推進機構産学官連携推進部門が研究シーズや大学の知財に基づく大学発ベンチャーの支援に力を入れているため、当センターでは学生ベンチャーの支援を中心に事業を実施している。

今年度もYNUベンチャー支援事業として、学生のベンチャー構想作りを支援する「フェーズⅠ」、教員も含めた研究者による創業間近の大学発ベンチャーを支援する「フェーズⅡ」施策を実施した。例年通り5月に公募を開始し、6月に選考を行った。今年度は、フェーズⅠへの応募が11件と件数が多かったため、選考会を2日に分けて実施した。プレゼン選考会の結果以下の3件を採択し、8か月間の活動を行った。採択された案件については、メンターとなる担当教員がついて、活動支援を開始した。

尚、フェーズⅡには本年度応募が無かった。

フェーズⅠ支援対象者

氏名	所属	テーマ	担当教員
堀田 壮真	理工学部 4年	訪日外国人と日本人学生の交流によるガイド体験を通じた英語教育・観光・地域社会課題の同時解決プラットフォームの構築	山田
小室 拓巳	経営学部 4年	ECサイトを寄付の入り口に——「ながら寄付」を促す『ポチキフ』の事業化・社会実装	為近、木内
木許 順賀	都市イノベーション学府 修士1年	谷戸地形におけるスリバチ的暮らしの再考 公園に開かれたシェアハウスのアプローチ整備	湯沢

以上の通り、本年度は上記3件の採択案件について、担当教員の支援の下、活発な活動が行われた。年度末には8か月間の活動内容を報告する「2025年度YNUベンチャー支援事業報告会」を開催した（2/24(火) 於：研究推進機構2階セミナー室）。

報告会の実施に当たっては、活動の取り組みをより多くの学生や教員に知らせたいとの考えから、今年度も、事前登録制による学内公開とし、リアル開催と同時にオンライン配信も実施した。現地会場、オンラインにて複数名の参加があり、ベンチャー支援事業に対する関心の高さを確認できた。各チームとも報告内容は期待した水準に達しており、今後の活動の進展に期待できるもの、ビジネス化の可能性を感じるものもあった。

以下に、本年度テーマ採択者による外部受賞などについて報告する。

- ◎ 理工学部 4 年堀田さんのチームが、福岡にて開催された民間企業主催の「SCC アプリコンペ 2025」にてビジネス部門で最優秀賞を受賞した。
- ◎ 経営学部 4 年小室さんが、採択テーマを事業化する株式会社 ZOYO を設立した。また、日本ファンドレイジング協会主催のピッチコンテストでグランプリを獲得した。尚、2020 年度から 2025 年度までの採択テーマのリストを巻末に掲載する。

2. ベンチャー支援採択者、センター支援者の活躍

本事業の過去の採択者・支援者の活躍状況をまとめて記載する。

※記事は各年報発刊時点の情報

[2020 年以降の法人登記]

- 株式会社 FineMetrics
神奈川県横浜市 2021 年 11 月設立 取締役：経営学部 准教授 本橋永至
- ディアベリー株式会社
神奈川県横浜市 2021 年 12 月設立 代表取締役：経営学部 4 年 渡邊洋平
- 株式会社ぐるり
神奈川県横浜市 2022 年 8 月設立 代表取締役：経済学部 4 年 中野賢伸

[過去の採択者の活躍]

- 横浜バイオテクノロジー株式会社 小倉 里江子(博士学生研究員 / 2010 年度ポストクアントレプレナー)
《受賞歴》
横浜ビジネスグランプリ 2019 最優秀賞
Japan Challenge Gate2020 ファイナリスト
- サグリ株式会社 坪井 俊輔(2017 年度フェーズ I、2018 年度よりフェーズ II 支援)
《受賞歴》
第三回日本アントレプレナー大賞 (サイエンス部門)、Singularity University Japan Global Impact Challenge2019 優勝、日本経済新聞 NIKKEI AG/SUM2019 優勝、EO GSEA 関西大会 優勝・日本大会 最優秀賞・世界大会 Innovation Award 受賞、リアルテックベンチャーオブ・ザ・イヤー2021 受賞、東洋経済 2021 すごいベンチャー100 認定、農林水産省 農林水産技術 大学発ベンチャー 認定(2021 年)、近畿経済産業局 J-Startup KANSAI 認定(2021 年)、環境省 環境スタートアップ大賞「環境スタートアップ事業構想賞」受賞(2022 年)

● 株式会社ディアベリー 渡邊洋平 (2021 年度フェーズ I 支援)

《受賞歴等》

環境省「TJ ラボ」採択 / 埼玉県横瀬町「よこらぼ」実証実験採択 / サステナブルセレクション表彰 / 横浜国立大学ビジネスプランコンテスト最優秀賞 / 神奈川県「かながわ SDGs パートナー」認定 / ちばぎん・はまぎん学生ビジコン 2022 SDGs アイデア賞受賞
横浜国立大学発学生ベンチャー称号認定

● 株式会社ぐるり 中野賢伸 (2021 年度フェーズ I 支援)

《受賞歴等》

横浜ビジネスグランプリ 2022 ファイナル進出 / ちばぎん・はまぎん学生ビジコン 2021 はまぎんアイデア賞受賞 / MIT-VFJ ベンチャーメンタリングプログラム採択 / AGORA LEVEL UP STAGE2022 受賞 / NEXs Tokyo スタートアップ採択
横浜国立大学発学生ベンチャー称号認定

● 株式会社 FineMetrics 本橋永至 (2021/22 年度フェーズ II 支援)

《受賞歴等》

2021 年度 NEDO Entrepreneures Program (NEP タイプ A 個人) 採択 / 2022 年度 NEDO Entrepreneures Program (NEP タイプ B 法人) 採択 / 2023 年度鹿児島県新産業創出ネットワーク事業ベンチャー支援補助金採択 / 2023 年度鹿児島県新産業創出ネットワーク事業研究開発支援補助金採択 / 2023 年度 NEDO NEP 報告会プレゼン賞受賞
横浜国立大学及び鹿児島大学より大学発ベンチャー称号認定

◎ 都市科学部 4 年白岩さんのチームが「おだわらデジコン城下町 (全国学生デジタルまちづくりコンテスト 2023 in ODAWARA)」において優秀賞を獲得

◎ 理工学府 D1 飯島さんのチーム「Curioseeds」が内閣府・男女共同参画局「夏のリコチャレ 2023」に参画、8/8(火)「博士といっしょに！夏休みの自由研究プロジェクト」を実施

[その他支援者の活躍]

◎ Y's Navi

デジタルマップ「Y's navi」の普及に取り組む白岩元彦さん(都市イノベーション学府 2 年)は、2023 年 9 月に mobilinet 株式会社を設立

◎ 成長戦略教育研究センターのベンチャービジネス支援窓口で相談に乗り、各種ビジコンなどへの参加を後押ししていた理工学部 3 年の堀田壮真さんが、他大学の学生

とチームを組んで挑んだ「第2回おだわらデジコン城下町(全国学生デジタルまちづくりコンテスト 2024 in ODAWARA)」にて「最優秀賞」を受賞。同じく「R6年度かながわ学生 ビジネスアイデアコンテスト」にて「優秀賞」を受賞

- ◎ 成長戦略教育研究センターのベンチャービジネス支援窓口で相談に乗り、活動をサポートしていた環境情報学府 D1 の瀬瀬真啓さんが、「ちばぎん・はまぎん学生ビジコン 2024」にて「大賞」を受賞

3. 他のベンチャー支援プログラムとの連携

起業支援に関わる外部連携、地域連携の一環として、神奈川県に関連団体が主催する「かながわビジネスオーディション」において、センター専任教員が外部評価委員を務めてきた。また、横浜銀行との包括連携協定に基づき「ちばぎん・はまぎん学生ビジコン」においても最終審査会の審査委員として参加した。

当センターでは、学内のシーズを掘り起こし、本施策と内外の起業支援施策を併用しながら学内ベンチャーの推進を心がけ、起業活動の活性化を目指して活動してきた。具体的には、起業に興味を持つ学生への情報提供のため、自治体や公的機関の推進するベンチャー支援施策をセンターHP上で紹介したり、個別に学生に案内したり、学生へのベンチャー関連情報の窓口としての機能も果たしてきた。

記録を取り始めた2023年以降の相談件数は、23年度4件、24年度27件、25年度は11件であり、これらの相談者をリスト化して、外部のビジコンや支援プログラムの提供などを行ってきた。

IV. ドクターキャリア開発事業

1. 活動全般

当センターでは、ドクターキャリア開発事業として、学位を取得した博士人材が、アカデミアだけにとどまるのではなく、民間企業の研究所やベンチャー企業など幅広く社会で活躍できるよう、人材育成と多様なキャリアパスの提示を目指したキャリア開発・支援事業を行ってきた。本事業は、当初 2012 年度より 4 年半に渡り、文部科学省の補助金(JST 委託)を受けて実施した『ポストドクター・キャリア開発事業』の自立後継事業として 2017 年度から実施している。

補助金事業では、ポストドク研究員をメインターゲットとしていたが、補助金終了後は、学内のニーズに合わせて主な対象を博士課程後期生にシフトし、事業内容の見直しと効率化を図る形で継続してきた。

このような活動は、全国の大学で様々な形で実施しており、いくつかの大学が、コンソーシアムとして協力体制を取っている。本学も北海道大学を中心とする「博士人材育成コンソーシアム」に参画し、年に数回の専門委員会での意見交換や、企業と大学関係者の意見交換会などに参加している。本コンソーシアムは、北大、東北大、名古屋大、お茶の水女子大、横浜国大、立命館大、兵庫県立大、阪大、OIST、神戸大、筑波大、新潟大、東京外国語大の 13 大学が連携するものであり、具体的な取り組みとしては、互いの大学主催イベントに連携大学の参加枠を設けてイベントへの相互乗り入れをしたり、合同で企業へのサイトビジットを企画したり、一大学では扱いきれない企画を互いに協力することで推進してきた。2022 年度からは、年に 1 回夏に、コンソーシアムの連携大学合同の博士向け企業合同説明会をオンラインで実施し、本学からも毎回数十名の学生が参加している。

また、本学独自の企画として、2015 年度より博士人材と企業とのマッチングイベント「キャリアパスフォーラム」を大学主催で開催している。このイベントをより広く学生に知らせ、有意義なものにするため、様々な施策を行ってきた。2020 年からの 3 年間は、コロナ禍の影響によりほとんど全ての施策を Zoom によるオンライン開催としてきたが、2023 年度からは、大学院の講義も対面が増えてきたこともあり、他の連携大学に先駆けて、キャリアパスフォーラムを対面開催に戻し、参加者を増やした。一方、学内イベントとしては、引き続きオンラインによるメリットを活かして、外部講師による博士向けキャリアセミナーや業界研究セミナーなどを実施している。

なお、当センターが実施した広報・相談活動は、以下の通りである。

- ・オリエンテーション：当センターが行う博士向けキャリア支援事業について、新入学および在学の博士課程後期生に対し Zoom によるオンライン説明会を行った。授業支援システムを通じて広報し、4/4(金)、4/8(火)と 2 回(2 回目は 1 回目の録画配信)実施、合計 32 名が参加した。

- ・D キャリ情報版：登録者に対して、博士向けのインターンシップやセミナー・イベント情報などを不定期にメールで配信。今年度は47報を発行した。登録者は計110名(博士：89名、修士：19名、その他(教職員)：2名)であった。(2026.2.26時点)
- ・ドクターキャリア相談室：主に博士の就職相談や、博士進学に迷う修士などの相談に乗る大学院生向けの相談室を毎週月・火・水曜日に開設した。実際には、事前にメールで予約を取り、相談者の都合に合わせて、面談をオンライン／対面にて実施。面談は、企業の研究開発部門での経験のある実務家教員として、ドクターキャリア開発担当の教員が基本的に2名で対応する。今年度は延べ12件(8名)の相談があった。(2026.2.26時点)
- ・インターンシップ：企業から直接募集案内のある大学院生向け長期インターンシップについて当センターが窓口となり取りまとめている。今年度、東芝研究インターンシップについては5名が応募し1名(理工M1)が採択された。

2. 企業と博士の交流会：キャリアパスフォーラム

新しい時代を担う博士人材を求める企業と企業での活躍を目指す博士が互いのマッチングを図る交流の場として2015年度より継続して実施している「キャリアパスフォーラム」を昨年度に引き続き対面イベントとして開催した。

日時：2025年10月17日(金) 10:30～17:00(懇親会17:00～18:00)

会場：神奈川産業振興センター(@関内) 会議室(13階)、多目的ホール(14階)

内容：【事前情報提供】

- ・企業紹介動画・採用情報(学生へ)
- ・学生のプレゼン資料(企業へ)

【当日】

- ・博士のポスターセッション(10:40～12:20(100分))：
博士毎にプレゼン資料をポスターボードに掲示し自身の研究内容・アピールポイントを紹介。企業参加者が自由に回り交流
- ・個別相談会(13:25～16:35(190分))：
企業毎にブースを設置し博士が訪問。冒頭に「参加企業1分挨拶」を実施
25分ごとに区切って入れ替え(計6回)
事前アンケートにより一部座席指定

参加企業：19社、60名 ※下線は、新規参加企業・団体。

- ・NTT (NTT 研究所) ・MS&AD インターリスク総研
- ・海上技術安全研究所 ・神奈川県立産業技術総合研究所 ・キオクシア
- ・京セラ ・産業技術総合研究所 ・島津製作所 ・住友金属鉱山



四方 研究担当副学長による開会挨拶



博士のポスターセッション



個別相談会



懇親会の様子

- ・TDSE ・TDK ・東京都立産業技術研究センター ・とめ研究所
- ・Nanofiber Quantum Technologies (NanoQT) ・日本入試センター
- ・日本発条 ・日立ハイテク ・Rapidus ・レゾナック (五十音順)

参加学生：博士課程後期生 43 名(当日欠席 3 名)(本学 32 名、内 YNU-SPRING24 名)

参加者の感想：

【学生】

「気になる企業とは深く会話ができた」「自身の就活が良いスタートを切ることができた」「こういう場があるのは非常にありがたい」など、本イベントが有意義な機会だったことを伺わせる感想が寄せられた。また、「企業の情報を横断的に獲得でき交流もできた」「自身の専攻と異なる企業についても把握ができた」「自身では見出せなかった企業でできることや社会貢献の面でご示唆をいただいた」など新たな出会いを生む機会になったと思える意見を伺うことができた。なお、本イベントに対する総合的な満足度は、「満足」又は「やや満足」合わせて 100%となった。

【企業】

「参加学生の質、イベントの運営、時間ともに非常に良かった」「ドクターを積極的に採用しているため、多くのドクター学生に一度にアプローチすることができ、大変貴重で有意義な機会でした」「1人1人と向き合う時間が多くてよかった」「学生から生の声を聴ける、とても貴重な機会」「1回の学生数が2、3名と少なく、概ね全員とコミュニケーションできた」など運営のきめ細かさを評価いただき高い満足度を示すコメントが寄せられた。一方で、「ポスターセッションの時

間が短く、十分回り切れなかった」「個別相談会のターム間の移動時間が考慮されておらず想定より質疑の時間が取れなかった」など課題を指摘する声も頂いた。総合的な満足度は、昨年に続き「満足」又は「やや満足」あわせて100%となった。

学生事前ガイダンス・企業動画視聴会・参加企業1分挨拶・指定席を設ける工夫・席数のバランスを細かく調整するなど、学生・企業の双方に配慮した緻密なイベント運営をご評価いただいた結果、学生・企業ともに総合的満足度100%を達成することができた。一方で、“ポスターを全部見切れなかった”という問題に対しては、見回りを追加し、時間制限対応を行ったが、まだ課題が残っているといえる。イベント運営は継続的なブラッシュアップが必要であり、頂戴したご意見を改善点として明確化し、来年度はより洗練されたイベントの実施を目指したい。

キャリアパスフォーラム参加者 就職内定者数

	参加企業数		参加者数	内定者数(A)	アカデミア・研究機関(PD)内定		企業内定	
					総数(B)	内ポスドク	総数(C)	内CPF参加企業
2024年度 (R6)	18	全体	41	10	1	0	9	4
		YNU	23	4	0	0	4	2
2023年度 (R5)	21	全体	37	17	5	2	12	5
		YNU	16	4	0	0	4	3
2022年度 (R4)	16	全体	34	19	3	1	16	5
		YNU	10	4	1	0	3	2
2021年度 (R3)	15	全体	30	19	6	4	13	8
		YNU	14	9	2	2	7	5
2020年度 (R2)	15	全体	30	14	4	3	11	4
		YNU	12	2	2	1	0	0
2019年度 (R1)	20	全体	47	25	8	4	17	7
		YNU	17	10	4	2	7	3

※参加年度末および翌年度末の2回、任意回答アンケートにより集計。

※参加者は延べ数、内定は実数。2社以上の内定も1件(1名)としてカウント。

※複数年参加者は参加最終年度で集計。

※2019年度は参加登録54名だったが当日欠席多数のためアンケート収集対象は47名。

※2024年度分は2024年度末時点の暫定データ。2025年度末にも収集予定。

※2025年度分は2025年度末にアンケート収集予定。

※(A)=(B)+(C)だが、2020年度は両方の内定者が1名いたため総数は1少ない。

※2020～2022年度はオンライン開催。

3. 各種イベント・セミナー

(1) 博士限定！「企業研究所(レゾナック)見学会」

イベント名：「レゾナック サイトビジット」

日時：2025年8月29日(金) 13:30~17:00

場所：株式会社レゾナック 共創の舞台
(横浜市神奈川区)

対象：横浜国立大学在籍の博士課程後期生

(新潟大学との共催のため新潟大博士学生も参加)

参加者：12名(横国大8名、新潟大4名)

内容：

- ・ 研究所見学
- ・ 企業研究紹介
- ・ 学生ショートプレゼン
- ・ 意見交換会



<当日の写真>



グループ A



グループ B

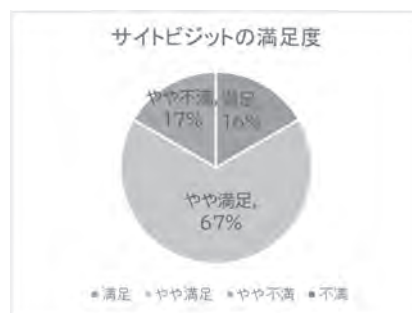


参加者全員

<参加者の感想>

「現地に訪問したことで、雰囲気を感じ取ることができました。企業からの一方的な説明だけでなく、学生側からのショートプレゼンと質疑応答の時間もしっかりあったので、双方向的な交流や発表のフィードバックを頂けて有意義でした。」

といったポジティブなコメントがある一方で、「学生の研究紹介を何のためにやったのかわからない。座談会の目的があいまい。」といったコメントもあり、次年度開催する場合は運営側の改善も必要と感じられた。



(2) NTT 研究所見学会

タイトル：NTT 研究所見学会 (厚木研究センタ)

日時：2025年9月25日(木) 13:30~

訪問先：NTT(株)厚木研究センタ (小田急：愛甲石田駅からバス約20分)

対象：横浜国立大学在籍の博士課程後期生

内容：・研究所見学・研究紹介

ーオンチップ光コンピューティング（NTT 先端集積デバイス研究所）

ー人工光ニューラルネットワーク（NTT 物性科学基礎研究所）

・博士研究紹介（博士学生のみ。質疑込み 10 分/人）

参加者数：6 名（博士 5 名、修士 1 名）

参加者アンケートでは、「国研や大学とは異なった、先端的な技術をもつ企業の中央研究所の雰囲気を感じ取ることができた」「基礎よりの研究ということで、アカデミックにとっても近い、プロの研究者だなと感じました」「進路・キャリアパスを考える上で非常に重要な情報を頂くことができました」などの感想が寄せられた。また、「想定外に良かった点として、参加していた他の研究室の学生と横のつながりができた点が挙げられます。自身の研究を見つめ直す意味でも、他分野の研究動向に触れたり、研究者と話す機会は重要だと感じました」といったイベントを開催する意義についてのコメントもあった。

（3）共催イベント

昨年度に引き続き SEAJ(一般社団法人 日本半導体製造装置協会)との共催により、半導体製造装置業界の概要や最新技術動向、将来展望などを学部生・大学院生に広く知ってもらおう狙いで、業界研究イベントを開催した。

イベント名：若手社員が経験を語る 2025～半導体関連メーカー特集～

日時：2025 年 11 月 26 日(水) 16:30～18:30

方法：Zoom によるオンライン開催

対象：横浜国立大学在籍の学生・ポスドク、博士人材育成コンソーシアム連携大学、個別連携大学の学生

当日プログラム

- | | |
|--------|------------------------------------|
| 16:30～ | 開会挨拶 |
| 16:35～ | 【第 1 部】企業紹介（2 分×8 社） |
| 16:55～ | 【第 2 部】若手社員の本音を知る Q&A セッション(Slido) |
| 17:10～ | 【第 3 部】バーチャル企業訪問（4 つのブレイクアウトルーム） |
| 18:10～ | 【第 4 部】個別企業交流会（各社ブレイクアウトルーム） |
| 18:30 | 終了 |

参加企業：8 社

・荻原製作所　・芝浦メカトロニクス　・東京エレクトロン

- ・東レエンジニアリング ・日本トムソン ・ニューフレアテクノロジー
- ・日立ハイテク ・リガク

参加学生：（当日参加）15名（内YNU：8）、（事前申込）24名 参加率63%

（所属内訳）横国大8、都立大2、筑波大1、神戸大1、兵庫県立1
東大1、熊本大1

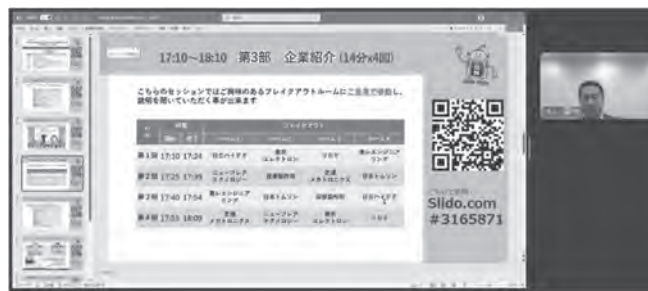
（学年内訳）M1:7、D3:2、B4:2、D1・D2・M2・B3:各1

今年度は、昨年度とほぼ同時期（昨年は11月28日（木））、同時刻の開催であったが、参加申込人数は昨年47名に比べて約半減となり、参加率も昨年77%に比べて低かった。原因としては、曜日の違い、参加企業の知名度（昨年度はソニーセミコンが参加した）、就活状況の早期化などが考えられるが、いずれにしても次年度は開催時期や内容に関して再考する必要がある。

第2部(Slido)の様子



第3部（バーチャル企業訪問）



4. コンソーシアム活動

2023年度から東京外国語大学が加わり13大学連携となった博士人材育成のためのコンソーシアムは、北大、東北大、名古屋大を中心に本学も参画して情報交換や共有プログラムの相互提供などの活動を行っており、各大学で主催するプログラムに他大学の参加枠を設けることで、博士人材に多種多様なセミナー・交流会参加の機会を提供している。

2022年度より始まった合同企画の企業説明会「13大学合同！企業合同説明会」は、今年度は7月10日（木）、11日（金）に開催され、2日間で企業43社、学生は13大学全体で延べ411名が参加した。本学からは延べ30名の博士学生が参加した。

今年度は13大学から149件のプログラムが共有された。今年度の本学学生参加状況については以下の表の通り。（2026.2.26時点）

No.	主催	タイトル	開催方法	開催日	YNU 参加者数 (注)
1	神戸大学	製薬・化学業界研究セミナー	Zoom	2025/05/16	2
2	SEAJ(横浜国立 大学)	よくわかる半導体業界 研究セミナー・春	Zoom	2025/05/28	(12)
3	新潟大学	キャリアマネジメントセミナー7	Zoom	2025/5/29	1
4	大阪大学	データと経験から博士キャリアを 考える	Zoom	2025/5/29	(2)
5	北海道大学	Basic understanding of job hunting in Japan for international Ph.D. students	Zoom	2025/6/25	3
6	大阪大学	博士のための就職戦略と キャリア・デベロップメント	Zoom	2025/6/25	4
7	コンソーシア ム	13 大学合同！ 企業合同説明会 2025	oVice	2025/7/10 2025/7/11	30
8	大阪大学	Career Fair 2025 ～博士人材と企業の交流会～	oVice	2025/7/17	1
9	お茶の水女子 大学	ワークインプログレス 2025	Zoom	2025/08/01	1
10	大阪大学	Career Fair 2025 ～博士人材と企業の交流会～	oVice	2025/10/15	1
				計	43 (14)

(注) : YNU 博士学生のべ参加者数。() 内は学部・修士・博士区別なしの事前申込者数。

【添付資料 1】 シュタインバイス大学日本研修 報告書

2025 年夏期 シュタインバイス大学日本研修 報告書

環境情報学府 情報環境専攻 修士課程 2 年

[概要]

本研修では、ドイツ・ベルリンの私立大学であるシュタインバイス大学の学生と日本側の参加者が合同チームを組み、3社の企業から提供されたケースに対して提案を行った。チームは計6チームあり、1社のケースに対してそれぞれ2チームが取り組んだ。

プログラムの構成は主に、事前研修、本研修、事後研修の3つに分かれている。事前研修では、マーケティングやビジネスフレームワークについて学習した。本研修ではドイツ側のメンバーと割り振られたケースについての提案を作成し、プレゼンテーションを行った。事後研修では各個人がチームの中でどのような貢献をしたのか、またチーム全体ではどのようにグループワークを進めていったかについて振り返りを行った。

[参加者]

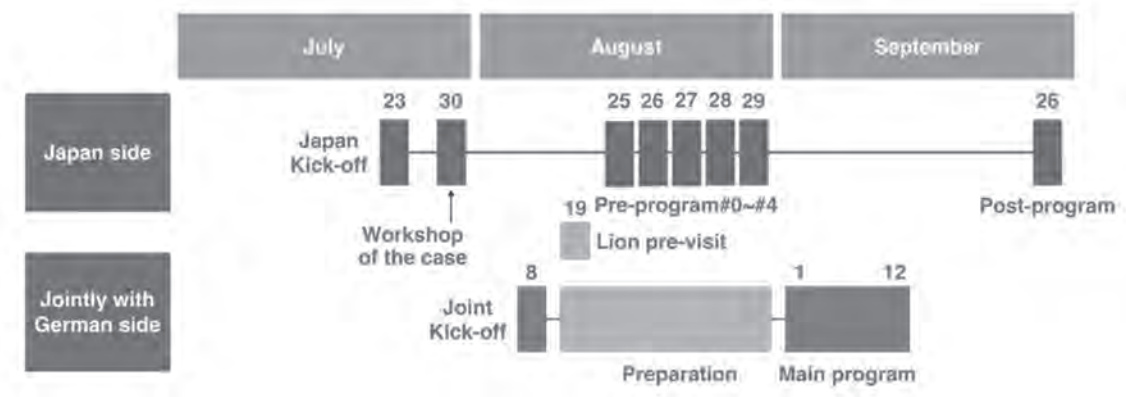
- 日本側 19名

東京農工大学：14名、電気通信大学：2名、横浜国立大学：1名、 社会人：2名

- ドイツ側 16名

[スケジュール]

日時	イベント	内容	場所
7/23	キックオフ ミーティング	プログラム全体の概要説明 チームメンバーとの顔合わせ	東京農工大学
7/30	ケース理解の ワークショップ	提供されたケースについてチームでの グループワーク	オンライン
8/8	合同キックオフ ミーティング	プログラム全体の概要説明 ドイツ側メンバーとの顔合わせ	オンライン
8/25～29	事前研修	マーケティングやビジネスフレームワーク についての講義・グループワーク	東京農工大学
9/1～4	本研修(前半)	ケースへの提案のためのグループワーク ・オンライン企業訪問	オンライン
9/7	フィールドトリップ	日独合同のチームで文化交流としての日本 観光	チームによって異なる
9/8～12	本研修(後半)	異文化コミュニケーションに関する講義 ケースへの提案のためのグループワーク ・プレゼンテーション	東京農工大学
9/26	事後研修	研修の振り返り	東京農工大学



[実施内容]

1. キックオフミーティング

7月23日のキックオフミーティングは日本側の参加者のみが集まり、プログラム全体の説明を受けた。また、英語で簡単に自己紹介を行い、その後チームに分かれ交流を行った。

8月8日の合同キックオフミーティングでは、初めて日本側とドイツ側のメンバーが顔を合わせた。全体への説明の後、チームに分かれて自分の専攻についてなどの自己紹介を行った。私のチームは日本側メンバー4人とドイツ側メンバー2人の計6人であった。

2. 事前研修

日本側のメンバーのほとんどは理系学生であり、ビジネスについて詳しい知識を持っていないため、それらに関する講義を受けた。主にSWOT分析やビジネスモデルキャンバスなどの分析手法について学んだ後、各チームで割り振られたケースに対しての分析を行った。最後に分析結果をまとめたプレゼンテーションを行った。

3. 本研修

私たちのチームはA社というドイツの精密機器メーカーのケースについて提案を行った。

前半はドイツ側のメンバーはまだ来日していないため、オンラインで開催された。主にケースについてチームで話し合いを行い、事前研修で発表したプレゼンテーションの内容をドイツ側メンバーと共有した。また、企業へのオンライン訪問も行った。企業の方にケースに関することについての質問や企業のビジネスについての質問をして、ケースへの理解を深めた。

後半では、対面で講義を受け、グループワークを行った。講義では、日本とドイツのコミュニケーションやマーケティングの違いなどについて学んだ。この講義で、日本のコミュニケーションはハイコンテクスト文化であり直接的な伝え方はしないのに対して、ドイツではローコンテクスト文化で否定的な意見もしっかりと伝えることなどを知ることができた。グループワークでは講義で学んだことを活かして、協力してケースに取り組んだ。

また、本研修中に参加者全員でケース提供企業の1つであるB社へ企業訪問を行った。実際にトラックが製造されている現場を見学させていただき、会社の歴史や海外との関係について説明していただいた。

最終日はこれまでのグループワークの成果を全体に示すプレゼンテーションを行った。各チーム約20分間の発表の後に質疑応答が行われた。

4. フィールドトリップ

今回のフィールドトリップはドイツ側のメンバーが来日した次の日に行われた。私たちのチームは鎌倉に行き、長谷寺や高德院などの観光スポットを巡った。その後、江の島に行き富士山に沈む夕日を見ることができた。フィールドトリップ中、ドイツメンバーとは観光スポットや日本の文化について話しているうちに徐々に打ち解けることができ、後日のグループワークもうまく進めることができたように感じた。



フィールドトリップでの写真

[事後研修]

はじめに各参加者がグループワークにおいてどのような貢献をしたのかを発表する2~3分の短いプレゼンテーションを行った。その後、各チームがどのようにグループワークを進めていった過程を説明するプレゼンテーションを行った。また、先生方や他の参加者からの質疑応答も行った。

[感想]

このような研修に参加することは初めてだったが、貴重な経験が得られ参加できてよかったと感じた。研修が始まる前は、異なる文化を背景に持つ人たちとうまくコミュニケーションをとることができるのか不安に感じていたが、最後には無事にプレゼンテーションを終えることができた。

事前研修中のビジネスやマーケティングに関する講義はもちろんのこと、本研修中にあった異文化コミュニケーションに関する講義で学んだ知識はグループワークを進めていくうえでとても役に立った。この知識によって相手の考え方・価値観を理解することができるようになり、お互いに配慮しながらディスカッションをすることができたように思う。

しかし、ディスカッションでは英語がうまく話せずもどかしい思いをすることが多かった。英語で文章を考えるのに時間がかかり発言するタイミングを逃してしまうことや、発言はできても正しく相手に伝わらないことがあった。しかし、そのような拙い英語でもドイツメンバーは私の発言を理解しようと努力してくれ、日本メンバーの人達もサポートしてくれた。そのおかげで私の意見もプレゼンテーションに取り入れてもらうことができた。このように英語のスキルが低くても発言してディスカッションに参加することがグループワークでは重要だと思った。

今回の研修に参加して、文化が異なる人々が持っている価値観を尊重し、自分とは異なる価値観の相手に対しても、同じ目標をもって互いに協力することができたように思う。今後またこのようなグローバルな環境に触れる機会があれば、この経験を活かし今回よりもさらに積極的に活動していきたいと思う。

【添付資料 2】YNU 博士の進路・キャリア形成状況に関するアンケート(2024 年度)

<対象> 横浜国立大学 博士課程後期 3年生以上

<回答> 27名 (2025/3/13~3/31)

<集計結果>

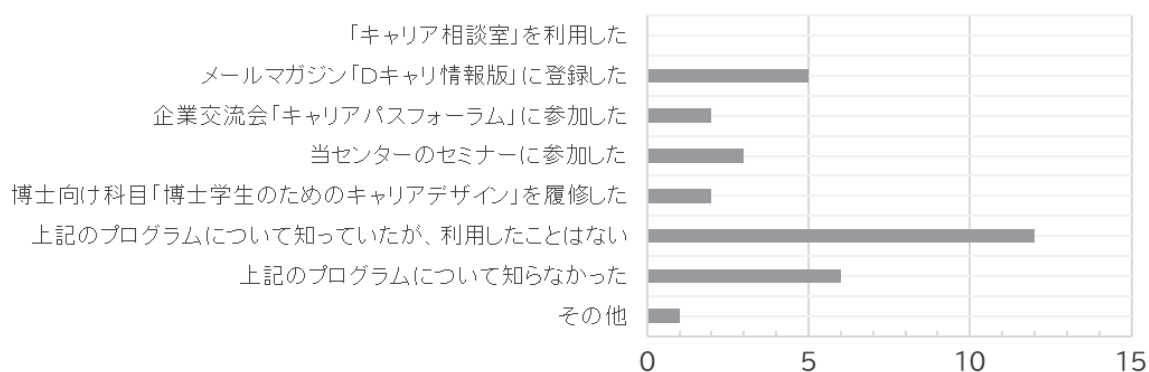


Q. 博士全般の就職活動について、どのように感じていますか/感じましたか？(抜粋)

- ・就活らしい就活はしていないが、博士人材が求められている空気は感じている。人手不足を感じている。
- ・脳の処理能力の向上の前後で見える景色が全く違った
- ・Very hard and requires full time commitments.
- ・I am not sure. For a foreigner, as I don't have Japanese Language skill, job search will be difficult.
- ・研究所等だけでなく、現場における実務にも目を向けて欲しい。
- ・もう少し真剣に論文に集中すべきだったと思う。

- 私は初めからアカデミアを志望していたが、いつから就活を始めて、いくつくらい面接を受けるものなのかわからず、全て指導教員に聞いた。分野によって異なる部分が多いので難しいかもしれないが、もう少し近い世代で身近に聞ける人がいたらよかったと思う。
- 取り組む時期がかなり遅れているため、早急に方針を立てたいと考えている。

Q. YNU博士向け支援プログラム(キャリア相談室、メールマガジン「Dキャリア情報版」、
「キャリアパスフォーラム」、各種セミナー等)の利用について



Q. YNU 博士向け支援プログラムについて、ご意見・ご要望等

- 「博士学生のためのキャリアデザイン」の講義が良かった。特に就活のような専門が異なる人に向けた発表についてアドバイスいただけたのがありがたかった。講義では企業就活をイメージしていたように感じるが、そのスキルはアカデミア就活でも非常に役に立ったと思う。
- とても良いプログラムです。まだ利用した経験がないのですが、後輩の経験から学生の就職活動をすごくサポートしているそうです。
- 大変素晴らしい取り組みだと感じました。納得のいく就職が出来る学生さんが多いのではないのでしょうか
- 非常に有益なプログラムと考えるので、今後の支援プログラムの発展を期待したい。

【別表 1】 センター開講講義 受講者数まとめ

対象	科目名	2020 年度	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度
学部	アントレプレナー入門	53	48	43	55	63	14
学部	実践新商品企画	24	206	312	167	250	341
学部	経営者の役割と従業員の役割	260	236	182	232	65	65
学部	研究開発論 (2023 年度にて閉講)	22	4	4	3	-	-
学部	アートマネジメント (2024 年度にて閉講)	154	304	51	118	59	-
学部	海と地域のつながりと活性化 (2020 年度より開講 2021 年度にて閉講)	12	12	-	-	-	-
学部	神奈川のみらい (2021 年度より開講)	-	399	364	359	142	300
学部	地域ではじめる新しい ソーシャルデザイン (2022 年度のみ開講)	-	-	17	-	-	-
大学院	イノベーションと課題発見 I	7	35	29	16	12	15
大学院	イノベーションと課題発見 II	6	9	15	7	4	7
大学院	実践企業成長戦略 I (2020 年度にて閉講)	17	-	-	-	-	-
大学院	神奈川県を取り組む技術課題	13	33	29	5	16	25
大学院	博士進学とキャリアデザイン (2023 年度より開講)	-	-	-	11	39	32
大学院	博士学生のためのキャリアデザイン I (2023 年度より開講)	-	-	-	12	15	46
大学院	博士学生のためのキャリアデザイン II (2023 年度より開講)	-	-	-	8	10	43

※「-」の年度は開講なし

【別表 2】ベンチャー支援事業 採択案件一覧(2020~2025 年度)

※所属・学年は採択当時 / 2020 年度はコロナ禍のため活動中断

【フェーズⅠ】

年度	所属・学年	氏名	テーマ	法人化
2021	経営学部 3 年	渡辺 洋平	『持続可能な社会に貢献するため、鹿革製品を販売する「Deervery 事業」』	○
	理工学府 M2	盛一 志仁	『「体験型」建築設計ツール、VR を用いた建築設計/教育の実現』	
	経済学部 3 年	中野 賢伸	『音声型史跡情報サービス「ぐるり」』	○
2022	都市科学部 3 年	岩本 海人	『交流デザインが社会を変える「ヨココネクト」』	○
	都市イノベーション学府 M2	布施 虎太郎	『VR を用いた建築体験ツール -建築学生の作品を社会へ-』	
	都市科学部 4 年	品川 七海 (採択後辞退)	『地元愛を深め地元産業を活性化する「旅するかながわ物産展」と「かながわ物産フォーチュンボックス」』	
2023	理工学府 D1	飯島 瑞稀	『博士学生による理科実験・フィールドワーク等を通じての日本の科学力の強化「Curioseeds」』	
	理工学部 3 年	梅澤 希	『YNU キャンパスの VR 化』	
	都市科学部 4 年	白岩 元彦	『地域固有の情報に着目し、リアルタイム情報を利用者と相互に共有しあえるデジタルマップ「Y's navi」の普及』	○
	理工学部 2 年	濱田 蒼太	『サークル入部を楽にするアプリケーションの開発』	
2024	理工学部 1 年	木本 大輝	『相手の顔と名前を覚えつつ、プロフィール帳を電子化して初対面の人間関係の構築を助ける』	
	環境情報学府 D3	棗田 智香子	『博士学生のためのプラットフォームづくりと理工系分野の後進育成』	
2025	理工学部 4 年	堀田 壮真	『訪日外国人と日本人学生の交流によるガイド体験を通じた英語教育・観光・地域社会課題の同時解決プラットフォームの構築』	
	経営学部 4 年	小室 拓巳	『EC サイトを寄付の入り口に——「ながら寄付」を促す『ポチキフ』の事業化・社会実装』	○
	都市イノベーション学府 M1	木許 順賀	『谷戸地形におけるスリバチ的暮らしの再考公園に開かれたシェアハウスのアプローチ整備』	

【フェーズⅡ】

年度	所属・学年	氏名	テーマ	法人化
2021	国際社会科学研究院 准教授	本橋 永至	『AI を活用した知財リーガルテック』	
2022	国際社会科学研究院 准教授	本橋 永至	『AI を活用した知財リーガルテック』(継続)	○

【別表 3】 YOXO カレッジ／アイデア創出ワークショップ／スキルセミナー

「YOXO カレッジ」オンラインセミナーは 2021 年度から 2025 年度まで 5 年間実施した。2022 年度から 2024 年度の 3 年間は、「アイデア創出ワークショップ」として、オンライン・対面によるワークショップ形式の講座を開催した。

また、地域貢献・人材育成の一環として、2022 年度、2023 年度には最先端技術を学ぶ初心者向けオンラインスキルセミナーを実施した。

以下に受講者数の情報をまとめて掲載する(年度ごとの実施詳細は、各年度年報に記載している)。

◇YOXO カレッジ

年度	シリーズタイトル	実施回数	受講者数
2021	イノベーター養成講座 他	20	257
2022	イノベーション入門 他	15	365
2023	イノベーターになろう！	10	315
2024	イノベーターの心得を学ぶ	11	238
2025	大企業のビジネス戦略から学ぶ	5	51

◇アイデア創出ワークショップ

年度	タイトル	実施形式	受講者数
2022	自分の中のアイデア発見ワークショップ ～内省と対話によるアイデア発想法～	オンライン (全 2 回)	19
2023	言葉を使ったアイデア発想トレーニング ～アイデアを出すチカラを鍛えよう～	対面	10
2024	～本質的アイデアをひねり出す工程はこんなに楽しい！～ 本質的アイデア創出テクニック	対面	13

◇スキルセミナー

年度	タイトル	実施形式	受講者数
2022	Unity ハンズオンワークショップ	オンライン (全 3 回)	18
2023	初心者向け：生成系 AI の活用法を学ぼう	オンライン	4

【別表 4】 センター主催セミナー 参加者数

開催日	開催場所・方式	タイトル	講師	参加人数 (会場/オンライン)
2022年 4月15日	図書館メディア ホール& Zoom	研究開発型ベンチャーの起業と 事業拡大（学内限定）	(株)オキサイド 代表取締役社長 古川 保典 氏	125 (65/60)
2022年 7月6日	Zoom	「ソニーグループのR&Dの姿勢 と博士学生の方々への期待」～ これからの社会の進化を支える、 R&Dの在り方～	ソニーグループ(株) シニア アドバイザー（ソニーグ ループ元副社長） 勝本 徹 氏	43
2024年 7月26日	理工学部 講義棟 A- 107&Zoom	「横国生 Be ambitious!」 ～これから社会に出られる皆さん へのTIPS～（学内限定）	ソニー・オリンパスメディ カルソリューションズ(株) 代表取締役社長 春名 靖史 氏	18 (11/7)

【別表 5】 センター主催 博士人材向けキャリアセミナー(学内限定) 参加者数

開催日	開催方法	タイトル	講師	参加人数
2020年 6月25日	Zoom	オンライン交流会 「就職内定者に聞く」	本学内定者 2 名	8
2022年 2月25日	Zoom	キャリアセミナー 「博士キャリアの現実と就職戦略」	東北大学 特任教授 増沢 隆太 氏	33
2022年 6月16日	Zoom	オンライン交流会 「先輩博士の就活体験談 ～内定者に聞く～」	本学内定者 2 名	16
2023年 2月28日	Zoom	キャリアセミナー 「今からはじめる博士のキャリア戦 略と自己アピール」	(株)エマージング テクノロジーズ 代表取締役社長 深澤 知憲 氏	22
2024年 2月28日	Zoom	キャリアセミナー 「これだけは知っておきたい 博士のキャリアガイダンス ～これから博士に進学する学生も～」	(株)エマージング テクノロジーズ 代表取締役社長 深澤 知憲 氏	24
2025年 2月19日	oVice	オンライン交流会 「先輩博士の就活体験談 ～内定者に聞く～」	本学内定者 2 名	6
2025年 3月5日 (録画再放送) 3月13日	Zoom	キャリアセミナー 「これだけは知っておきたい 博士のキャリアガイダンス 2025 ～これから博士に進学する学生も～」	(株)エマージング テクノロジーズ 代表取締役社長 深澤 知憲 氏	37 ※延べ人 数

おわりに

本報告書は、2025年度(令和7年度)の成長戦略教育研究センターの活動報告と共に、今年度末をもって発展的に解消される当センターの2020年度(令和2年度)以降、6年間のデータをまとめたものです。

成長戦略教育研究センターは、2020年度に地域連携推進機構下のセンターとして再編されました。過去に遡ると、その前身である『成長戦略研究センター』は、2つの組織「企業成長戦略研究センター」と「ベンチャービジネスラボラトリー(VBL)」の統合により2011年(平成23年)に発足しました。その後、2015年(平成27年)に5年間の時限組織として一度更新され、5年間活動後の2019年(平成31年・令和元年)に外部評価と最終報告を経て終了しました。2020年度以降は、前述の通り、新たに地域連携推進機構下のセンターとして、現組織である成長戦略教育研究センターに引き継がれてきました。そして、5年間の活動を終えた2024年度(令和6年度)には、1年間だけの更新申請を行い、2025年度をもって廃止とし、その活動を発展的に解消することとなりました。

当センターで行ってきた活動のうち、教育人材育成事業は、閉講する科目もありますが、一部は経営学部の授業や地域連携推進機構による全学教育科目として引き継がれます。また、ベンチャー支援事業は、その一部が研究推進機構に、ドクターキャリア開発事業は、教育推進機構 博士課程後期学生支援部門によって引き継がれます。その事業ごとに、新たな組織において、本学学生の教育や地域貢献に資する活動に発展することを願っています。

最終年度にあたり、これまで当センターの発展にご尽力くださった多くの先輩方、事務職員の皆さまに、心より御礼申し上げます。

○編集メンバー一同

教授	為近 恵美
非常勤教員	湯沢 雅人
非常勤教員	山田 敏哉
非常勤教員	勝木 信二
非常勤教員	木内 恵子
事務補佐員	藤原 典子
事務補佐員	皆川 奏枝

YNU 横浜国立大学

地域連携推進機構
成長戦略教育研究センター